市原市文化財センター年報

昭和57・58年度

財団法人 市原市文化財センター

序

市原市は自然環境に恵まれた関東有数の広大な面積を有する市であります。そのため，原始，古代よりの人々の足跡である埋蔵文化財も非常に豊富であり，後世に伝え残すべきものもまた非常に多いところであります。しかしながら，本市は京葉工業地帯の中心地として発展もめざましく，それに伴うさまざまな周辺の開発も著しく，埋蔵文化財の保護と開発との調和に苦慮していることろであります。近年の大規模開発に伴う埋蔵文化財の発掘調査は，予想もしなかった原始，古代の新事実を明らかにし，全国的に脚光を浴びる半面，埋蔵文化財を取り巻く状況は非常にきびしいものがあり，極めて複雑な局面を迎えています。

このような状況の中で財団法人市原市文化財センターは，市原市内の開発に伴う埋蔵文化財の調査研究に対応すべく，昭和57年４月１日に設立されました。以来３ヶ年が経過し，その間の受託事業は３４件にものぼり，今後もしばらくの間は増加の一途をたどるものと予想されます。

当センターは，設立当初は５名（技術職３名）の人員でありましたが，現在は庶務課５名，調査課16名（技術職15名）の組織へと拡充されました。

本書は，当センターの活動の記録，事業の概要，発掘調査の概要を，年度毎にまとめる年報という性質上，本来，毎年発刊するものでありますが，今回は昭和57年，58年の２ヶ年分を一冊としています。以後は定期刊行として昭和59年度分より，一冊ずつの刊行を計画しております。今後は当センターの顔として広く活用されるように努力したいと思います。

終わりに，当センターの設立に御尽力と御協力を頂きました千葉県教育委員会と市原市教育委員会に，また，発掘調査の実施に当り，ご理解とご協力を頂きました関係各位に対し，深く感謝申し上げます。

昭和６０年７月

財団法人　市原市文化財センター
理事長　　星　　野　　一　　郎

目　　次

序 …… 理事長　星野一郎

Ⅰ　財団法人 市原市文化財センターの概要 …… 1

Ⅱ　昭和57年度の機構 …… 2

Ⅲ　昭和57年度事業概要 …… 3

Ⅳ　昭和58年度の機構 …… 6

Ⅴ　昭和58年度事業概要 …… 7

Ⅵ　昭和57・58年度調査概要 …… 10

1.　菊間手永貝塚 …… 近藤　敏 …… 12

2.　草刈貝塚 …… 高橋康男 …… 15

3.　小田部新地遺跡 …… 山口直樹 …… 19

4.　能満番面台遺跡 …… 田所　真 …… 23

5.　上総国府推定地 …… 田所　真 …… 26

6.　天神台遺跡 …… 浅利幸一 …… 30

7.　池ノ谷遺跡 …… 田所　真 …… 37

8.　福増遺跡 …… 田所　真 …… 41

9.　片又木遺跡 …… 山口直樹 …… 44

10.　石川城郭跡 …… 鈴木英啓 …… 48

11.　堰の上遺跡 …… 山口直樹 …… 52

12.　皿郷田茂遺跡 …… 山口直樹 …… 53

13.　見立林遺跡 …… 田中清美 …… 55

14.　唖王山遺跡 …… 田中清美 …… 55

昭和57・58年度受贈図書一覧 …… 56

Ⅰ　財団法人 市原市文化財センターの概要

(1) 設立趣旨

房総半島のほぼ中央部に位置する本市は，地理的条件と気候風土に恵まれ原始，古代を始めとする多くの遺跡が存在する。特に奈良時代には国府，国分寺が造営され上総国の政治，経済，文化の中心地であった。このような本市の歴史を物語る遺跡の存在は本市市民にとって大きな誇りであり，これらの文化財を共有の財産として保護し，後世に伝えていくことは，われわれの責務である。しかし一方では，首都圏に位置し京葉工業地帯の中核都市として都市基盤の整備，関連公共施設の充実等を早急に図る必要があると同時に，宅地造成，レジャー施設建設を目的とする民間資本の流入も顕著である。その結果，いわゆる「開発と文化財の保護」の調整を図ることが緊急の課題となり，こうした背景のもとで，遺跡等埋蔵文化財の保護と地域の発展に対応した埋蔵文化財の調査体制を速かに充実する必要があり，財団法人市原市文化財センターが設立された。

(2) 目　　的

市内における遺跡等埋蔵文化財の調査研究及び市民の文化財保護思想の涵養と普及等を図るとともに，開発と環境整備の調和を図り，市民生活の向上と地域文化の充実に寄与する。

(3) 事　　業

ア　市内遺跡等埋蔵文化財の調査研究

イ　委託を受けてする遺跡等埋蔵文化財の発掘調査

ウ　文化財保護思想の涵養と普及

エ　その他この法人の目的を達成するために必要な事業

(4) 設立経過

昭和56年６月19日　調査法人設立の方針決定

12月22日　設立準備委員会の設置

昭和57年３月１日　設立認可申請書の提出

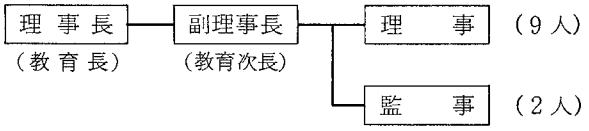
４月１日　千葉県教育委員会指令第80号により，設立許可

同　　上　市原市馬立 817番地，旧馬立保育所施設を仮用し業務を開始

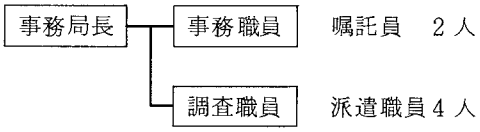
Ⅱ　昭和57年度の機構

(1) 組織

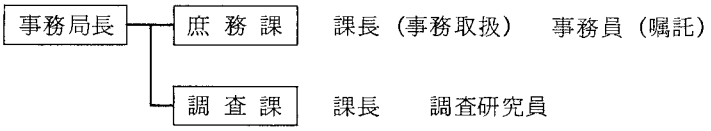
ア．役員　　総数　11人　(理事９人，監事２人)



イ．事務局　　総数　６人　(内事務職員２人，調査職員４人)



７月１日より



(2) 役員

職　名	役職名	氏　名
理事長	教育委員会教育長	石井　正泰
副理事長	教育委員会教育次長	大津　吉源
理　事	早稲田大学名誉教授	滝口　宏
理　事	和洋女子大学教授	寺村　光晴
理　事	姉崎神社宮司	海上　信久
理　事	市企画部長	川島　穣

職　名	役職名	氏　名
理　事	市総務部長	関　見旭代
理　事	市都市部長	伊藤　昭
理　事	市総務部財政課長	佐野　年男
監　事	市下水道部企画調整室長	西賀　静雄
監　事	市福祉事務所長	山中　定義

(3) 職員

職　名	氏　名
嘱託事務局長	永野　武保
嘱託事務員	相野　光江

職　名	氏　名	職　名	氏　名
調査研究員	郷田　良一	調査研究員	高橋　康男
調査研究員	近藤　敏	調査研究員	田所　真(5/1より)

7月1日より

事務局長〔嘱託〕　永野武保

庶務課

課長（事務取扱）　永野武保

事務員（嘱託）　相野光江

調査課

課長　郷田良一

調査研究員　近藤　敏

調査研究員　高橋康男

調査研究員　田所　真

(4) **施設**　所在地及び施設

市原市馬立 817番地

木造1階　3棟

床面積　205.3688㎡

III　昭和57年度事業概要

(1) 理事会の開催

① 第1回理事会　昭和57年4月21日　会場　市原市役所市長特別応接室

議　題　辞令交付

経過報告

協議事項　当面の問題について

組織について

事業計画および収支予算について

② 第2回理事会　昭和57年5月13日　会場　市原市役所議会棟第1委員会室

議案第1号　法人組織の変更について

議案第2号　事業計画の変更について

議案第3号　補正予算（第1号）について

③ 第3回理事会　昭和57年7月27日　会場　市原市役所議会棟第1委員会室

議案第1号　就業規則の制定について

議案第2号　組織規定の制定について

議案第3号　処務規定の制定について

議案第4号　人事規定の制定について

議案第5号　役員の旅費に関する規定の制定について

議案第６号　財務規定の制定について

④　第４回理事会　昭和58年２月９日　会場　市原市役所 901会議室

議案第１号　事業計画の変更について

議案第２号　補正予算（第２号）について

⑤　第５回理事会　昭和58年３月28日　会場　市原市役所 801会議室

議案第１号　昭和58事業年度事業計画について

議案第２号　昭和58事業年度歳入歳出予算について

議案第３号　組織規程の一部改正について

議案第４号　処務規程の一部改正について

議案第５号　人事規程の一部改正について

議案第６号　財務規程の一部改正について

(2)　会計監査

昭和57事業年度の会計監査は，昭和58年５月12日，財団法人市原市文化財センター事務所において，西賀静雄，山中定義両監事により実施された。

(3)　昭和57年度調査事業

番号	事業名	委託者	契約年月日（当初）	契約額(最終)	精算額	終了日	備考
1	国分寺台土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財調査	市原市	57. 4. 1	20,000,000	18,000,000	58. 3.31	国分寺台遺跡群発掘調査の管理監督とこれに係る事務処理
2	総合病院建設に伴う埋蔵文化財調査	市原市	57. 7.20	1,267,000	1,267,000	57. 8.20	発掘（確認調査）見立林、唾壬山遺跡 包含地2,250㎡の10%
3	姉ケ崎ニュータウン建設事業に伴う埋蔵文化財調査	(財)電気通信共済会 日本新都市開発㈱	57. 6.30	5,366,000	3,250,000	57.10.25	発掘（確認調査）片又木、道谷、未上、下伊沢遺跡 包含地120,000㎡の10%
4	京葉機材株式会社土砂採取に伴う埋蔵文化財調査	京葉機材㈱	57.10. 6	2,766,000	2,112,000	57.11.11	発掘（確認調査）小田部新地遺跡 包含地5,356㎡の10%
5	㈱太平洋クラブゴルフ場造成に伴う埋蔵文化財調査	㈱太平洋クラブ	57.11.15	14,834,000	14,721,000	58. 1.31	発掘（確認調査）石川城址 中世城郭址38,000㎡の10%
6	国府小学校改築に伴う埋蔵文化財調査	市原市	58. 2.28	7,984,000	2,266,000	58. 3.31	発掘（確認調査）上総国府跡推定地 包含地1,400㎡の10%

(4) 昭和57年度決算報告書

収入

（単位：円）

区分	予算額 当初予算額	予算額 補正予算額	予算額 合計	決算額	予算額に比べ決算額の増減	備考
基本財産運用収入	1,000	—	1,000		△ 1,000	
基本財産運用収入	1,000	—	1,000		△ 1,000	
事業収入	89,960,000	△ 39,300,000	50,660,000	41,616,000	△ 9,044,000	
受託事業収入	89,960,000	△ 39,300,000	50,660,000	41,616,000	△ 9,044,000	
寄附金収入	5,000,000	△ 5,000,000	—	—	—	
寄附金収入	5,000,000	△ 5,000,000	—	—	—	
雑収入	39,000	—	39,000	150,283	111,283	
受取利息	30,000	9,000	39,000	150,205	111,205	
雑入	9,000	△ 9,000	—	78	78	
基本財産収入	5,000,000	5,000,000	10,000,000	10,000,000	—	
基本財産収入	5,000,000	—	5,000,000	5,000,000	—	
運用財産収入	—	5,000,000	5,000,000	5,000,000	—	
合計	100,000,000	△ 39,300,000	60,700,000	51,766,283	△ 8,933,717	

支出

（単位：円）

区分	予算額 当初予算額	予算額 補正予算額	予算額 合計	決算額	不用額	備考
管理費	15,785,000	7,897,000	23,682,000	23,216,722	465,278	
役員報酬	120,000	—	120,000	90,000	30,000	
給料手当	3,279,000	△ 647,000	2,632,000	2,415,130	216,870	
福利厚生費	88,000	△ 47,000	41,000	—	41,000	
旅費、交通費	318,000	299,000	617,000	535,310	81,690	
通信運搬費	650,000	41,000	691,000	614,531	76,469	
備品費	1,000,000	1,568,000	2,568,000	1,706,250	861,750	
事務費	1,130,000	3,243,000	4,373,000	4,755,081	△ 382,081	
負担金	9,200,000	2,882,000	12,082,000	12,481,500	△ 399,500	
賃借料	—	279,000	279,000	252,000	27,000	
損害保険料	—	117,000	117,000	116,270	730	
租税公課	—	52,000	52,000	51,650	350	
交際費	—	70,000	70,000	170,000	△ 100,000	
雑費	—	40,000	40,000	29,000	11,000	
事業費	67,061,000	△ 41,526,000	25,535,000	19,445,832	6,089,168	
給料手当	50,076,000	△ 40,926,000	9,150,000	8,494,366	655,634	
福利厚生費	240,000	△ 190,000	50,000	21,485	28,515	
旅費、交通費	200,000	△ 169,000	31,000	60,130	△ 29,130	
通信運搬費	480,000	△ 480,000	—	—	—	
備品購入費	3,000,000	△ 3,000,000	—	—	—	
事務費	3,018,000	△ 1,592,000	1,489,000	1,432,131	56,869	
賃借料	5,406,000	△ 1,903,000	3,503,000	2,980,900	522,100	
諸謝金	68,000	△ 38,000	30,000	1,040	28,960	
損害保険料	130,000	△ 130,000	—	—	—	
租税公課	143,000	△ 143,000	—	—	—	
負担金	1,640,000	△ 1,640,000	—	—	—	

（単位：円）

区分	予算額 当初予算額	予算額 補正予算額	予算額 合計	決算額	不用額	備考
委託費	2,660,000	3,594,000	6,254,000	6,451,000	197,000	
工事請負費	—	5,000,000	5,000,000	—	5,000,000	
雑費	—	28,000	28,000	4,780	23,220	
積立金	5,810,000	△ 5,810,000	—	229,887	△ 229,887	
減価償却積立金支出	810,000	△ 810,000	—	229,887	△ 229,887	
文化財センター建設積立預金支出	5,000,000	△ 5,000,000	—	—	—	
繰入金支出	5,000,000	5,000,000	10,000,000	—	10,000,000	
繰入金支出	5,000,000	5,000,000	10,000,000	—	10,000,000	
予備費	4,000,000	△ 2,517,000	1,483,000	—	1,483,000	
予備費	4,000,000	△ 2,517,000	1,483,000	—	1,483,000	
次期繰越収支差額	2,344,000	△ 2,344,000	—	—	—	
次期繰越収支差額	2,344,000	△ 2,344,000	—	—	—	
合計	100,000,000	△39,300,000	60,700,000	42,892,441	17,807,559	

Ⅳ　昭和58年度の機構

（1）組織

役員　　職員

- 理事長
- 副理事長
- 常務理事
- 理事
- 監事

庶務課　課長　主事　主事補　嘱託事務員

調査課　課長　主任調査研究員　調査研究員　嘱託調査研究員　嘱託事務員

（2）役員

職名	役職名	氏名
理事長	教育委員会教育長	石井　正泰（7月16日まで）
		星野　一郎（7月18日から）
副理事長	教育委員会教育次長	石井　作二（9月19日まで）
	教育委員会教育指導部長	横濱　辰夫（9月19日から）
常務理事	専任	井原　茂
理事	早稲田大学名誉教授	滝口　宏
理事	和洋女子大学教授	寺村　光晴

職名	役職名	氏名
理事	姉崎神社宮司	海上　信久
理事	市企画部長	川島　穣
理事	市総務部長	関　見旭代
理事	市都市部長	伊藤　昭
理事	市総務部財政課長	佐野　年男
監事	市下水道部企画調整室長	西賀　静雄
監事	市福祉事務所長	山中　定義

(3) 職　員

所　属	職　名	氏　名
庶務課	課　長	小茶　文夫
	主　事	浅利　幸一
	主事補	相野　光江
	事務員（嘱託）	秋田　晴美
調査課	課　長	郷田　良一
	主任調査研究員	山口　直樹
	兼調査研究員	浅利　幸一

所　属	職　名	氏　名
調査課	調査研究員	森本　和男
	調査研究員	近藤　敏
	調査研究員	高橋　康男
	調査研究員	田所　真
	調査研究員（嘱託）	鈴木　英啓
	事務員（嘱託）	高浦　貞子

V　昭和58年度事業概要

(1) 理事会の開催

① 第1回理事会　昭和58年5月30日　会場　市原市役所 901会議室

議案第1号　昭和57事業年度事業報告について

議案第2号　昭和57事業年度歳入・歳出決算について

② 第2回理事会　昭和58年8月30日　会場　市原市役所 901会議室

議案第1号　補正予算（第1号）について

議案第2号　寄附行為の一部改正について

議案第3号　処務規程の一部改正について

議案第4号　役員の旅費に関する規程の一部改正について

議案第5号　財務規程の一部改正について

③ 第3回理事会　昭和59年2月29日　会場　市原市役所 901会議室

議案第1号　事業計画の変更について

議案第2号　補正予算（第2号）について

議案第3号　昭和59事業年度事業計画について

議案第4号　昭和59事業年度歳入歳出予算について

(2) 会計監査

昭和58事業年度の会計監査は，昭和59年5月23日財団法人市原市文化財センター事務所において，白鳥一夫，山口節両監事により実施された。

(3) 昭和58年度調査事業

番号	継続又は新規	事業名	委託者	遺跡 名称及び種別	遺跡 面積・数量	事業内容	契約年月日	契約金額	終了年月日	精算金額
1	新規	国分寺台土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財調査	市原市	天神台遺跡（縄文・弥生・土師集落祉、古墳）	m^2 30,000	本調査	58. 4. 1	円 99,517,000	59. 3.31	円 99,517,000
2	継続	国府小学校改築に伴う埋蔵文化財調査	市原市	上総国府跡推定地（土師散布地）	900	確認調査	58. 6.30	4,003,000	58. 7.31	2,771,000
3	継続	姉崎ニュータウン造成に伴う埋蔵文化財調査	(財)電気通信共済会日本新都市開発㈱	片又木遺跡（縄文・土師包含地）	10,000	本調査	58. 4.15	15,212,000	58. 9.30	15,212,000
						整理・報告書	58.11.18	6,355,000	59. 3.31	6,355,000
4	継続	京葉機材株式会社山砂採取に伴う埋蔵文化財調査	京葉機材㈱	小田部新地遺跡（縄文・弥生・土師集落祉、古墳）	5,756	本調査	58. 4. 1	16,518,000	58. 9.30	11,990,000
						整理・報告書			59. 3. 1	4,497,000
5	新規	都市計画道路草刈西広線建設に伴う埋蔵文化財調査	市原市	草刈貝塚（縄文貝塚）	3,859	本調査	58. 7.15	27,983,000	59. 1. 5	27,983,000
6	新規	第二清掃工場建設関連工事に伴う埋蔵文化財調査	市原市	池ノ谷・福増遺跡（縄文・土師散布地、古墳）	2,500 古墳1基	確認調査	58. 5.31	8,966,000	58. 9.30	3,934,000
						本調査（第1次）	58.12. 1	4,974,000	59. 1. 5	4,974,000
						本調査（第2次）	59. 1. 6	16,663,000	59. 3.31	16,663,000
7	新規	市道114号線改良工事に伴う埋蔵文化財調査	市原市	能満番而台遺跡能満旧三山塚（土師散布地・三山塚）	1,500 塚1基	確認調査（1,500 m^2）本調査（塚の一部）	58. 7.30	6,896,000	58.10.30	6,427,000
8	新規	里見高滝土地改良に伴う埋蔵文化財調査	市原市加茂土地改良区	皿郷田茂遺跡（土師散布地）	6,100	確認調査 本調査 整理・報告書	58. 9.30	5,200,000	59. 3.14	5,200,000
9	新規	下水処理場関連工事に伴う埋蔵文化財調査	市原市	菊間手永貝塚（縄文貝塚）	3,000	本調査 一部整理	58.12. 3	23,991,000	59. 3.31	23,991,000
10	継続	株式会社太平洋クラブゴルフ場造成に伴う埋蔵文化財調査	㈱太平洋クラブ	石川城祉（中世城郭）	約 150,000	整理・報告書	58. 6.29	3,626,000	59. 3.31	3,626,000
11	新規	水道取水場管理用道路建設に伴う埋蔵文化財調査	市原市	堰の上遺跡（縄文・土師散布地）	2,500	確認調査	58.12. 1	4,862,000	58.12.28	4,862,000

(4) 昭和58年度決算報告

収入

（単位：円）

区分	予算額 当初予算額	予算額 補正予算額	予算額 合計	決算額	予算現額に比べ決算額の増減	備考
事業収益	283,959,000	△45,957,000	238,002,000	238,002,000	0	
受託事業収入	283,959,000	△45,957,000	238,002,000	238,002,000	0	
事業外収益	445,000	386,000	831,000	994,122	163,122	
預金利息	134,000	403,000	537,000	685,678	148,678	
有価証券利息	26,000	△ 19,000	7,000	20,944	13,944	
基本金見返り定期預金利息	285,000	2,000	287,000	287,500	500	
雑収益	484,000	△ 421,000	63,000	63,663	663	
雑収入	1,000	61,000	62,000	62,930	930	
前年度繰越金	483,000	△ 482,000	1,000	733	△ 267	
合計	284,888,000	△45,992,000	238,896,000	239,059,785	163,785	

支出

（単位：円）

区分	予算額 当初予算額	予算額 補正予算額	予算額 合計	決算額	不用額	備考
受託事業費	263,593,000	△45,231,000	218,362,000	220,370,081	△2,008,081	
報償費	225,000	△ 114,000	111,000	21,070	89,930	
職員費	29,326,000	2,201,000	31,527,000	31,510,269	16,731	
賃金	112,296,000	△ 224,000	112,072,000	106,363,947	5,708,053	
旅費	365,000	28,000	393,000	310,860	82,140	
法定福利費	7,766,000	△ 4,330,000	3,436,000	4,726,346	△1,290,346	
委託料	25,901,000	△ 8,330,000	17,571,000	24,847,900	△7,276,900	
使用料及び賃借料	38,790,000	△ 456,000	38,334,000	39,154,620	△ 820,620	
需用費	15,662,000	△ 1,013,000	14,649,000	13,434,019	1,214,981	
役務費	437,000	△ 360,000	77,000	1,050	75,950	
工事請負費	32,500,000	△32,500,000	0	0	0	
雑費	325,000	△ 133,000	192,000	0	192,000	
研究事業費	1,250,000	△ 860,000	390,000	291,570	98,430	
報償費	80,000	△ 50,000	30,000	0	30,000	
賃金	960,000	△ 760,000	200,000	208,000	△ 8,000	
旅費	60,000	0	60,000	9,160	50,840	
会議費	100,000	△ 50,000	50,000	17,550	32,450	
需用費	50,000	0	50,000	56,860	△ 6,860	
普及事業費	3,740,000	△ 600,000	3,140,000	1,380,850	1,759,150	
需用費	3,700,000	△ 600,000	3,100,000	1,360,850	1,739,150	
役務費	40,000	0	40,000	20,000	20,000	
一般管理費	13,753,000	3,250,000	17,003,000	19,737,530	△2,734,530	
報酬	2,220,000	30,000	2,250,000	2,500,000	△ 250,000	
報償費	420,000	△ 31,000	389,000	230,400	158,600	
賃金	2,400,000	△ 200,000	2,200,000	2,377,505	△ 177,505	
旅費	1,565,000	0	1,565,000	1,214,630	350,370	
厚生費	60,000	149,000	209,000	208,800	200	
委託料	0	572,000	572,000	571,240	760	
会議費	280,000	100,000	380,000	375,335	4,665	
使用料及び賃借料	279,000	△ 20,000	259,000	258,130	870	
需用費	2,300,000	1,957,000	4,257,000	7,108,475	△2,851,475	
役務費	650,000	0	650,000	623,830	26,170	
備品購入費	3,000,000	△ 348,000	2,652,000	2,651,600	400	
退職給与金	247,000	0	247,000	246,800	200	
公課費	52,000	△ 30,000	22,000	21,300	700	
交際費	0	127,000	127,000	125,660	1,340	
雑費	280,000	△ 178,000	102,000	102,200	△ 200	
減価償却費	0	1,122,000	1,122,000	1,121,625	375	
予備費	500,000	△ 499,000	1,000	0	1,000	
予備費	500,000	△ 499,000	1,000	0	1,000	
繰越金	2,052,000	△ 2,052,000	0	0	0	
次期繰越金	2,052,000	△ 2,052,000	0	0	0	
合計	284,888,000	△45,992,000	238,896,000	241,780,031	△2,884,031	

Ⅵ　昭和57・58年度調査概要

財団法人 市原市文化財センターでは，昭和57・58年度事業として，13の遺跡を対象として確認調査及び本調査を実施している。これらの遺跡は，次頁の調査遺跡位置図に見るように，市原市内の広範囲に亘って分布している。

各々の遺跡の調査結果を瞥見して見ると，縄文時代・弥生時代・古墳時代・奈良，平安時代及び中近世に至るまで様々な時代の遺跡があり，それぞれの遺跡からは，又多種多様な遺構・遺物が発見され，往時の人々の生活の一端を垣間見るに充分な資料を提供している。

縄文時代では，７ケ所の遺跡から，住居跡，炉穴，陥し穴等々が検出され，早期～晩期に至る各時期の遺構・遺物がある。遺構の面では，天神台遺跡の調査によって関山式期の住居跡17軒が検出され，当該期の集落構造研究に貴重な資料を得ている。又，遺物面では，特に草刈貝塚に於いて，中部地域に顕著な発達を見せる顔面把手が出土し，この種の土器研究及び分布圏を考えていく上で，新たな資料を追加することができた。土器では，他に福増遺跡から晩期終末期に位置付けられる土器が出土している。

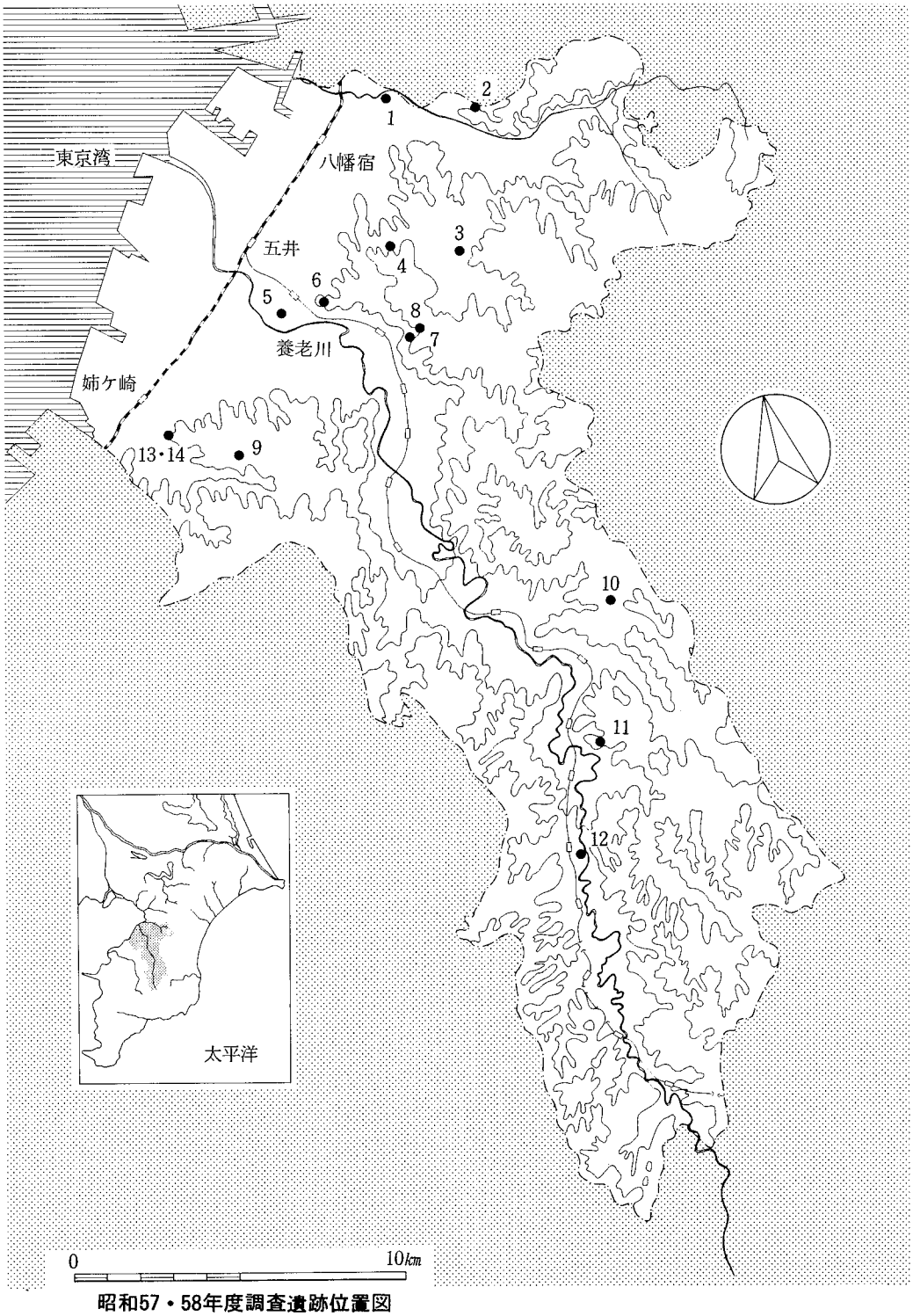
弥生時代の遺構・遺物は，４遺跡で確認され，中期及び後期の住居跡あるいは，方形周溝墓等を検出しているが，中でも小田部新地遺跡で14基，天神台遺跡では27基と多数の方形周溝墓が発見されるなど，弥生時代に於ける葬制研究上看過できない遺跡例もある。

古墳時代の遺跡は，５遺跡が対象となり，古墳あるいは当該期の住居跡等が調査されている。これらの内，特に挙げなければならない遺跡に天神台遺跡がある。当遺跡では，今回26基の古墳について調査が施行されている。天神台遺跡に於いては，古墳時代全般に亘って古墳の築造を見ることができ，昭和58年度以前の調査結果とも合わせると，当地域に於ける古墳の変遷・有り方について多くの示唆に富んだ資料を入手することができた。なお，天神台遺跡については，その後も調査を継続中であり，更に多くの古墳が調査され，是等も合わせこの地に於ける古墳文化がより究明されて行くことと思われる。

奈良・平安時代についての遺跡は，４ケ所挙げることができる。住居跡，墓跡等の調査が行なわれているが，特視される遺構として，小田部新地遺跡で検出された地下式壙がある。小田部新地遺跡では，地下式壙が２基検出されているが，この内１基から，焼骨片を内包する蔵骨器が発見されている。

なお，昭和58年度には，戦国時代に築かれた城跡の一つである石川城郭跡の確認調査も施行され，市原中部に見られる一つの城郭跡の概略が明らかにされている。

以下，それぞれの遺跡概要を紹介するが，幾つかの遺跡に於いては，既に調査報告書が公けにされているので，詳細については，本報告書を是非，参照していただきたい。



昭和57・58年度調査遺跡位置図

1：菊間手永貝塚　2：草刈貝塚　3：小田部新地遺跡　4：能満番面台遺跡　5：上総国府址推定地　6：天神台遺跡　7：池ノ谷遺跡　8：福増遺跡　9：片又木遺跡　10：石川城郭跡　11：堰の上遺跡　12：皿郷田茂遺跡　13：見立林遺跡　14：喰王山遺跡

1　菊間手永貝塚

所在地　市原市菊間字北野谷貝塚台２１６２番地

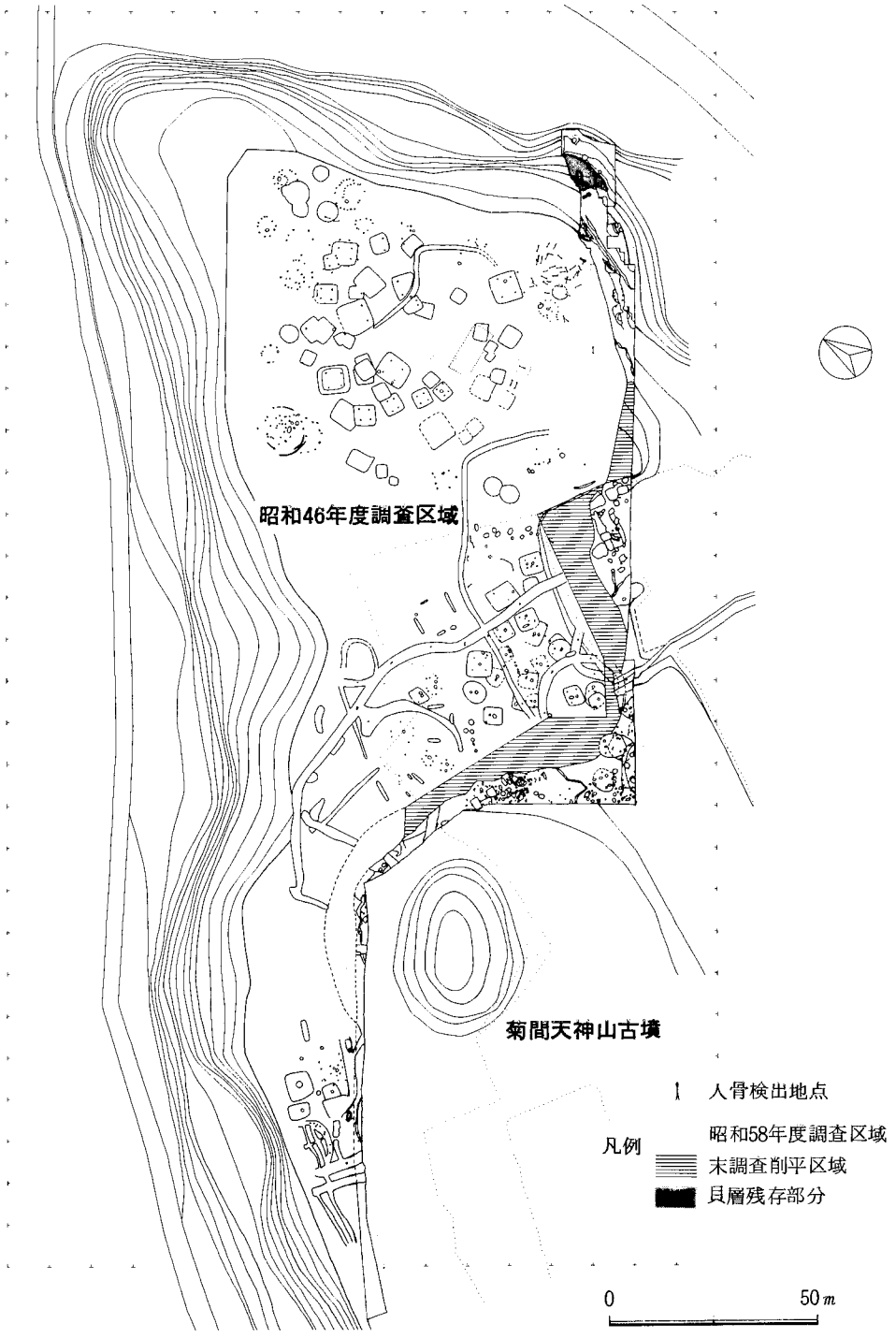
調査期間　昭和58年12月３日～昭和59年３月31日

調査面積　2,984 ㎡

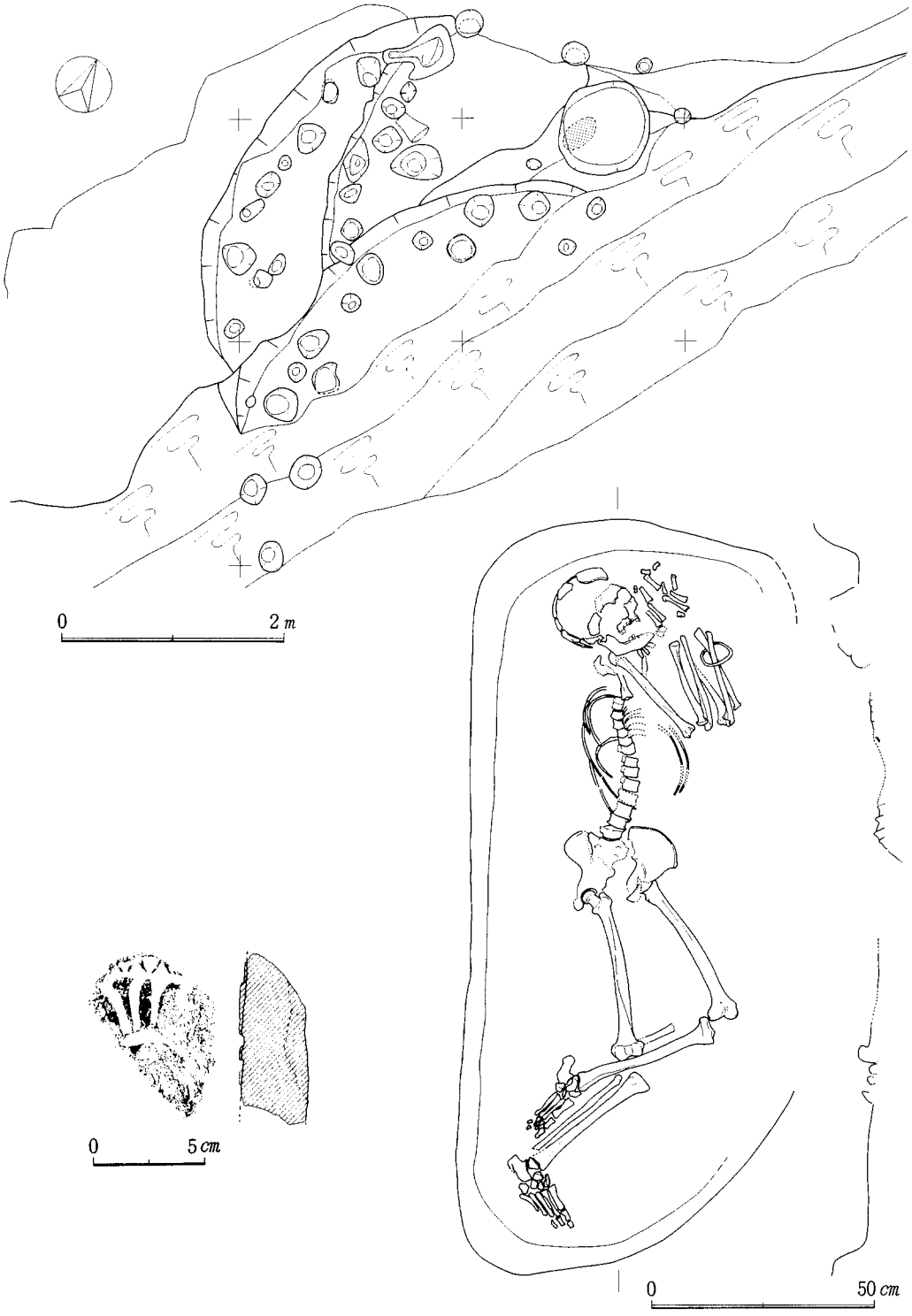
調査概要　当遺跡は，埋め立て地を含まない当時の海岸線より約 2.5㎞奥まった台地上に位置し，その間に砂州・海岸平野がある。遺跡の立地する台地は，下総台地に一般的にみられる樹枝状に開析された支谷に挟まれている。台地は東方を村田川，西方を養老川によって分断された幅６㎞の台地の北辺にある。台地は海岸線にほぼ平行し，旧汀線の海蝕面が直線状にみられる。当遺跡の占地する台地は，台地奥部で標高約20m，台地先端部で標高約16mである。台地北縁は海蝕されており，低地との比高差は約10mである。東縁は幅約50mの支谷が湾入し，遺跡が占地する台地の南側まで深く曲がり，入り込んでいる。当遺跡の調査は昭和47年度に平野考古学研究所が，下水処理場建設に伴う場内整地に先立って北側の大半を行なっている。今回の調査は，旧調査区の南側に沿う形で場内外周の道路部分を 500mにわたり行なった。

旧石器については有無確認のテストピットを設けたが発見できなかった。縄文時代では後期の住居址５軒，小竪穴１基，土壙に伴った人骨１体が検出された。貝層は台地東縁斜面にわずかに残るのみであり，南側斜面にも貝層の存在は予想されたが，近世の開墾によって貝層部分は残らず破壊されていた。弥生時代では中期に位置づけられる住居址３軒があり，旧調査でも同様に検出されているので同一集落址内の住居址群と考えられる。古墳時代は住居址２軒，古墳の周溝が３基確認され，そのうち一基は菊間天神山古墳の周溝北側部分である。円筒埴輪片と形象埴輪片と思われる破片が若干出土している。奈良・平安時代は土壙が３あり，調査区内からはこれまで知られていない鐙瓦片や，古瓦が出土している。菊間廃寺に接近していることから，その関連にも興味がもたれる。中世には土壙墓群が菊間天神山古墳東側部分に造成され，大きく改変して周溝を破壊している。近世以降は溝状遺構３条，道路２条，地下式土壙４基，土壙墓が13基検出されており，多数の陶器片等が出土している。

当遺跡は縄文時代から近世に至る，集落址，貝塚，墓地と変化に富む内容豊かな重複遺跡である。調査面積は旧調査面積を加えると15,000㎡に及ぶ。東方台地にあった菊間遺跡（千葉県都市公社　1974）の関連も深いだろう。村田川右岸流域の調査が進むにつれて，当遺跡を含む左岸流域との関係も重要な要素で資料的にも価値が高まるであろう。旧調査の成果を基礎に十分な報告をしたい。


昭和46年度調査区域
菊間天神山古墳
人骨検出地点
凡例
昭和58年度調査区域
未調査削平区域
貝層残存部分
0
50 m

菊間手永貝塚全体図



菊間手永貝塚住居跡及び人骨検出状態と鐙瓦拓影図

2 草（くさ）刈（かり）貝塚

所在地　市原市草刈1319他

調査期間　昭和58年7月15日～昭和59年1月5日

調査面積　3,859 ㎡

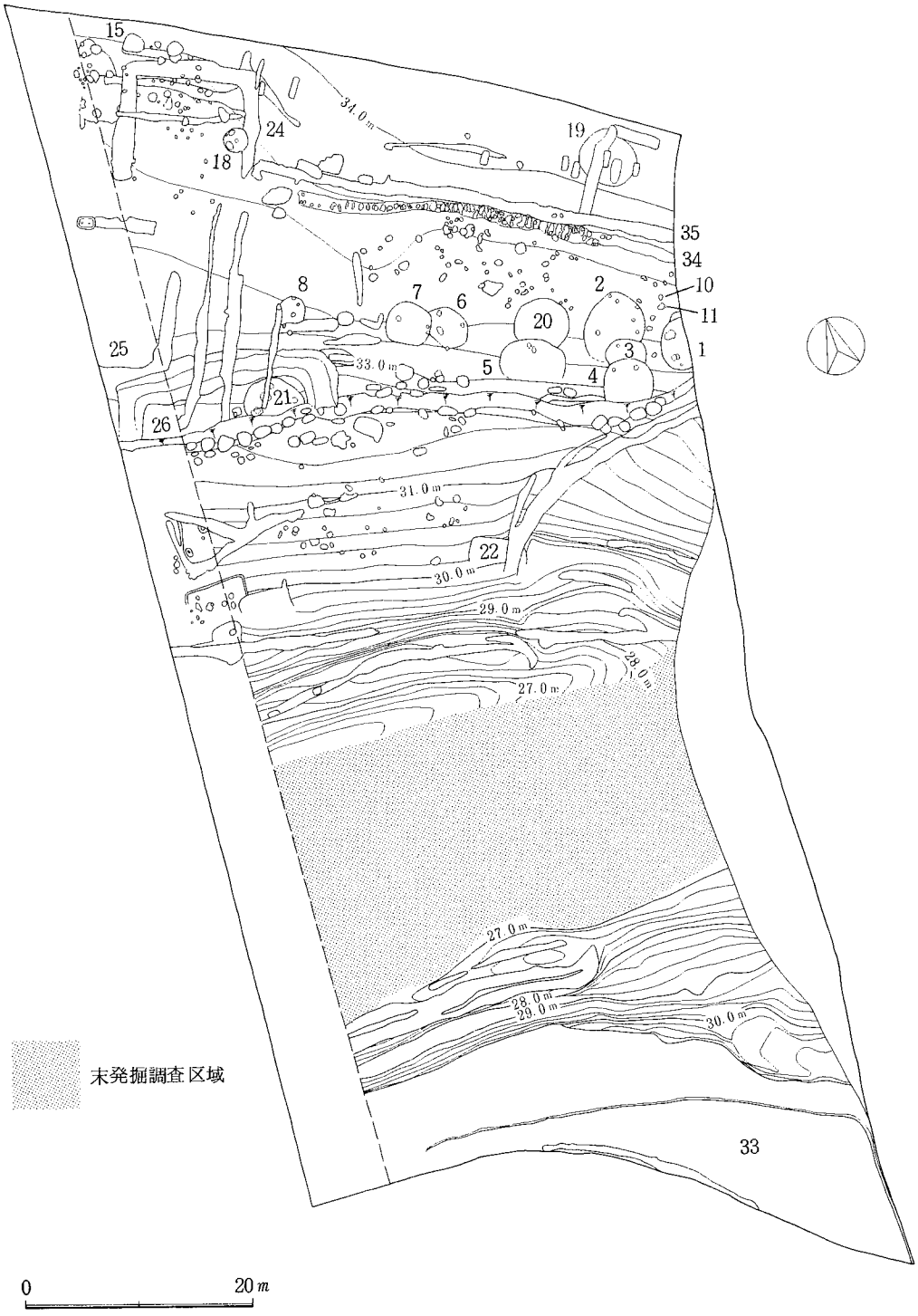
調査概要　本遺跡は村田川北岸のいわゆる草刈台地の南に位置している。この台地は千葉・市原ニュータウンの造成工事が現在も進行中で，それに先立つ発掘調査が，千葉県文化財センターにより実施されている。本遺跡の北側は草刈遺跡で，先土器時代から歴史時代にまで至る複合遺跡であり，現在も調査は継続中である。また西側は千葉急行電鉄線の建設に先立つ調査が行われ，さらに南側では六之台遺跡の調査が行われている。したがって今回の調査区域は，草刈台地という広がりの中の一部分であって，周辺の遺跡群の延長線上に位置づけられるべき存在であると言えよう。

今回の調査した遺構および出土した遺物について，以下，時代順にのべることにする。

縄文時代のものは，遺構では住居址10軒，貯蔵穴6基，炉址3基であった。いずれも中期（阿玉台式～加曽利E式）に属すると考えられる。住居址の平面形は楕円形で，4～5の柱穴をもつものが主であり，炉はほとんどの住居址に伴い，また深鉢の口縁部を使用している例が3軒で見られた。貯蔵穴は，竪穴状もしくは円筒状で，獣骨を出土したもの（18号址），イボキサゴのブロックを出土したもの（15号址）もある。[1] また，深鉢の底部付近を使用した炉と思われる遺構が3例（10～12号址）見られたが，いずれも住居址に伴ったものではない。[2] 遺物は土器・石器は言うまでもなく，他の顔面把手や土器片錘が出土した。顔面把手は後述する方形周溝墓（17号址）の周溝の覆土中から出土したもので，[3] 土器本体との接合関係は不明である。土器片錘は，長径6～7 cm，短径3～4 cmの楕円形を呈するものが見られる。このような片錘の出土は集落周辺の水域環境および漁労活動を反映しているものと考えられる。

弥生時代では，住居址が4軒検出された（19～22号址）。いずれも後期に属する土器を出土している。21号址は南半を欠失しているが，柱穴を4つもっていたと思われ，久ヶ原式の甕を出土している。22号址は谷寄りの緩斜面にあり，これも南半を欠失しており，柱穴は確認できなかった。この住居址からは，壺・台付甕が出土している。いずれも弥生町式に属するものであろう。

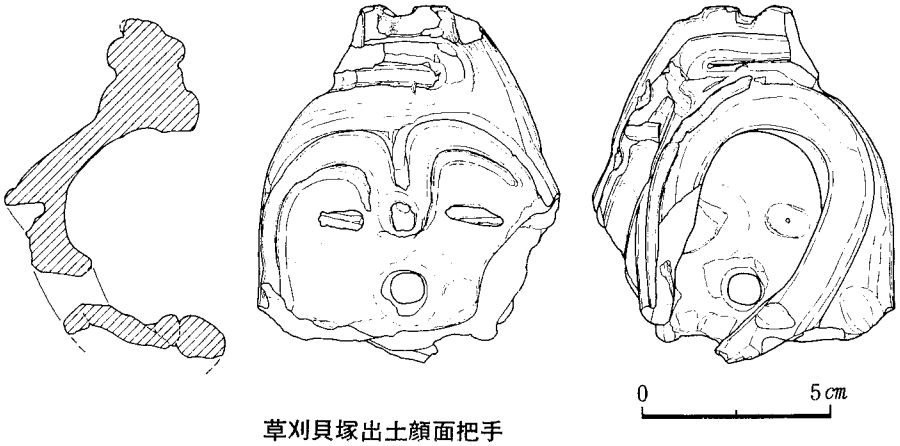
古墳時代では，方形周溝墓が3基検出された（24～26号址）。26号址は，南半が欠失しているが，3基のうちでは最も規模の大きいものと考えられる。主体部は検出されなかったが，周



草刈貝塚調査区域内遺構関連図

溝の直上から，五領期の坩や管玉等を出土している。他の２基からは時期を比定し得る遺物等の出土はないが，切り合い関係・形状・規模等を考えると，いずれも，大きく時期を隔てるものではないと思われる。他に，坩・石製模造品・土玉が，調査区南側の六之台遺跡に近い部分で出土している。わずかに下がった部分に比較的集中して出土しているが，その部分に何らかの意味があったかどうかに関しては，にわかには断定し難い。

中近世以降では，道路状遺構・台地整形部がある。このうち34号址では，浅い楕円形の掘り込みが連続する形で検出され，遺構に伴うものと考えられるが，機能等は不明である。ただし35号址とほぼ平行していることを考えると，それに伴う柵状施設であった可能性もある。台地整部と称している遺構（33号址）は，調査区南側にあり，高さ20cm程の段状に整形したもので，面から東に延び，ゆるいカーブを描いて南方に向かっている。今回の調査区域内では完結していない。したがって，その性格に関しては，不明である。あるいは，何らかの施設を中心に巡っていたかもしれない。[4] 他に10数条の道路状遺構が検出されている。なお，この時期に関しては，良好な遺物の出土はなかった。



草刈貝塚出土顔面把手

以上が，今回の調査の概要であるが，最後に，今後の検討課題についていくつか挙げておきたい。まず第１に顔面把手の問題。顔面把手付きの土器の分布を把握し，さらに可能であるならば，個々の資料の検討を行い，今回出土した資料の位置づけを行う必要がある。本来ならば土器本体と接合した状態，つまり「顔面把手付き土器」として検討するべきであるが，とりあえずは「顔面把手」としての取り扱いにとどめざるを得ない。把手１つをもって，文化圏その他を云々できないのは当然のことであるが，再検討することは決して無意味ではないと言えよう。第２に，これは将来的な課題であるが，海進・海退期における周辺環境の変化と，それに伴う集落構造の変化の関係を明らかにする必要がある。村田川流域の沖積地形成に至る過程に関しては，自然科学の方面からのアプローチが度々なされている。[5] その成果と，これまでの発掘調査によって得られた成果を対比して行く必要があろう。

(1)他の遺構においては，ハマグリのブロックが数箇所検出されているが，イボキサゴを主体とするものは本遺構で確認されたのみである。貯蔵穴の覆土中位の層からの出土であり，またほぼ同レベルから深鉢の口縁部の大型破片が出土していることからして，貯蔵穴としての機能停止後，ある程度堆積が進んだ時点における投棄行為によるものではないかと考えられる。

(2)このような例については，後世の攪乱により床面が消失したことによる可能性があり，柱穴との関係で想定し得る場合もあるが（たとえば30号址），この3例の場合，住居址を　想定するに足る柱穴の配置は確認できなかった。

(3)今回の調査区域を含め，付近一帯は後世に大規模な土の移動があったと思われる。本例もその一端をうかがわせるものであるし，前述の柱穴や炉のみを残すのみの住居址や，方形周溝墓・住居址等で全体をとどめていない例の存在も，明らかにそのような状況があったことを示していると言えよう。

(4)この整形部は六之台遺跡の方に続いていることはほぼ間違いない。したがって，六之台遺跡における中近世以降の土地利用の様相が把握し得れば，機能・性格等，明確になる可能性もある。

(5)村田川流域における沖積地形成に至る過程に関しては，

松島義章「III　千原台地区の沖積低地」『千原台ニュータウン　1』　千葉県文化財センター　1980

松島義章「XI　木戸作貝塚周辺の沖積低地」『千葉東南部ニュータウン7—木戸作遺跡（第2次）—』千葉県文化財センター　1979

辻誠一郎・南木睦彦・小池裕子「縄文時代の植生文化と農耕—村田川流域を例として—」『第四紀研究　第22巻第3号』1983

等の研究成果がある。

環境と人間のかかわり合いを知る上で，自然科学的データの蓄積は不可欠である。今後の一層のデータの収集がなされることを期待したい。

3　小田部新地遺跡

所在地　市原市小田部 208，荻作 967他

調査期間　昭和58年4月1日～昭和58年9月30日

調査面積　5,756m²

調査概要　小田部新地遺跡は，村田川支流の神崎川中流域に位置する。千葉市土気地区を源として西流する村田川は市原市潤井戸で，勝間地区より北上してきた神崎川と合流し，約1km先の海岸平野に至るまでの間に幾つかの支流を合わせ，さらに1km下流の河口に及んでいる。この神崎川との合流部から海岸平野に至る付近は広い沖積地を形成しており，両岸の沖積層台地及び段丘面には多くの遺跡が密集している。村田川北岸には東南部・千原台地区遺跡群，南岸には菊間・大厩遺跡群，本流と神崎川との分岐部には潤井戸の遺跡群が広がり，各地区ともに県内でも有数の遺跡を有している。神崎川と本流との分岐点より約4km遡った西岸台地上，標高48～50mに本遺跡はあり，付近は支流であるちもかかわらず比較的広い沖積地を形成している。周辺の遺跡としては同一台地上北東端部に荻作1号墳，南部には縄文時代中期及び奈良時代の遺構を検出している小田部小谷吹上遺跡，西側隣接台地上に能満分区貝塚，南側対岸台地上には小田部古墳がある。

検出された遺構とその数，及び主な出土遺物を時代別に記すと以下の通りである。

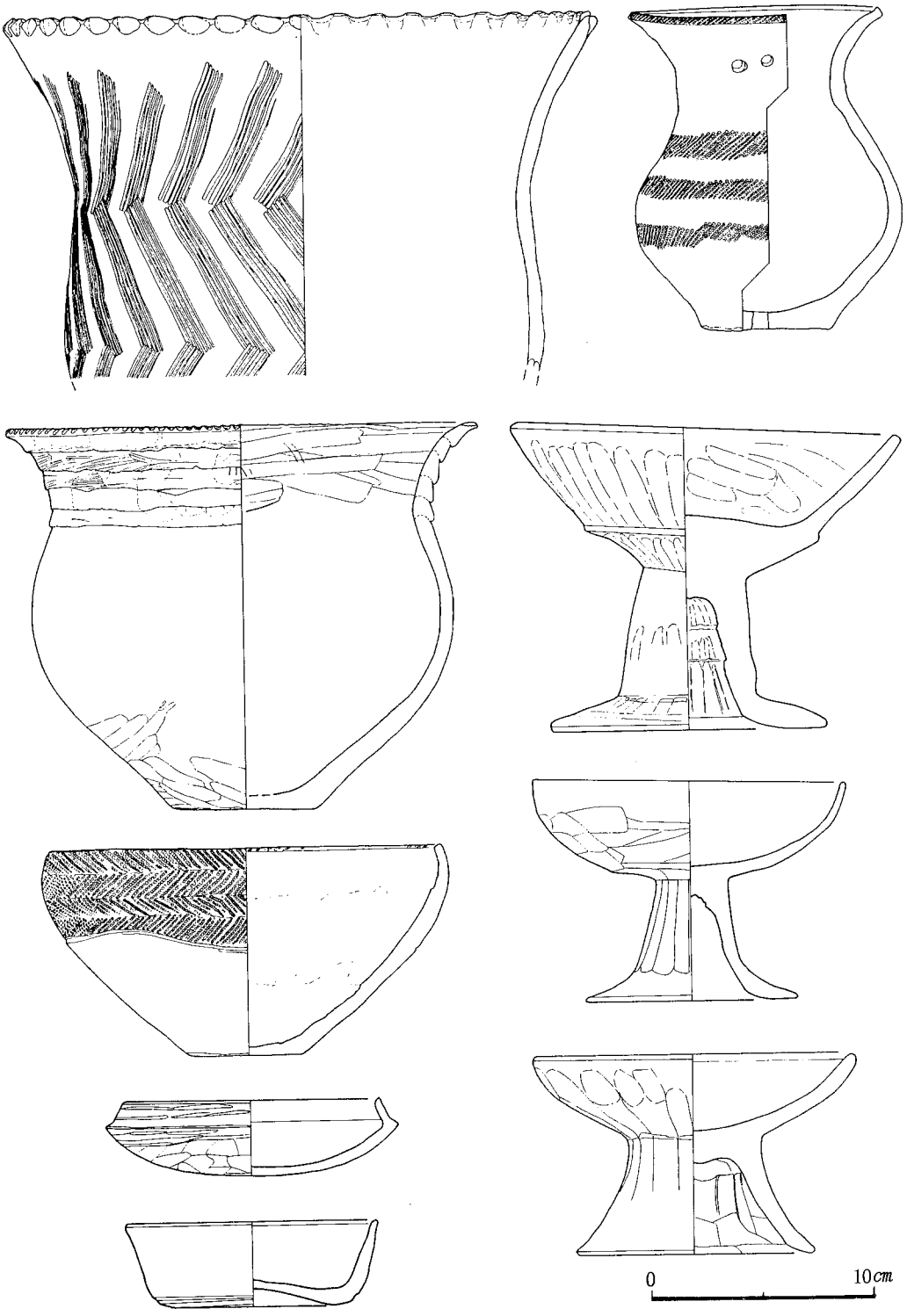
先土器時代は，調査区域の約2％のローム層の確認を行なったが，剥片，チップが調査区南側より若干出土したのみであった。

縄文時代は，早期から晩期までの数型式の土器が包含層中から出土しているが，主体となるのは中期阿玉台式土器で，多量の石器を伴うとともに3軒の住居址を検出している。これらの住居址は調査区南側の台地縁辺部に沿ってつくられており，包含層中の遺物も同地域に集中して出土している。その他の遺構としては炉穴2基，陥し穴3基がある。

弥生時代は，中期宮ノ台式期から後期久ヶ原式・弥生町式期に連なる方形周溝墓14基と土壙墓7基，宮ノ台式期の住居址2軒と同期の性格不明土壙1基が検出されている。このうち方形周溝墓は古い時期には四隅の切れた形式で調査区北半に群在するが，新しい時期になると一隅のみが切れた形式となり群から離れて南側台地先端部に孤立する様になる。後者は2基検出されているが，このうちの一基は中央主体部が甕棺となる特異なものである。尚，後期と思われる土壙墓の一つからは管玉が9点出土しているが，そのうちの2点は鉄石英で造られている。

古墳時代の遺構としては，古墳2基，土壙墓3基，住居址8軒が検出されている。古墳のう

小田部新地遺跡調査区内遺構関連図



小田部新地遺跡出土土器実測図

ち一基は一辺約15mの方墳で，周溝コーナー内に和泉式土器の高杯と坩とをセットで出土している。もう一方は径約20mの円墳で古式の鬼高式土器を出土している。方墳は調査区南端，円墳は南東端に位置しており，両者共に台地の先端コーナー部を占地，眼下に沖積地を覗んでいる。この２つの古墳は，かって調査された荻作１号墳や調査区西側に現存する数基の古墳と合わせて荻作古墳群を形成している。３基の土壙墓は調査区東辺台地縁辺に沿って長軸を東西方向に一つにしてやや距離をおいて並ぶ様につくられており，これらより金銅製耳環，直径71mmの彷製珠文鏡，ガラス玉などが出土している。住居址はこれら墳墓より新しく調査区全体に散在している。

奈良・平安時代の遺構としては，方形周溝遺構２基，地下式小型横穴２基，掘立柱建物址１棟が検出された。このうち方形周溝遺構の一基は地下式小型横穴を主体部としている。また地下式小型横穴の１つからは甕を利用した蔵骨器が出土し，中から焼骨片が検出されているが，他の地下式小型横穴も玄室が小さく，同様に火葬骨が納められていたものと思われる。掘立柱建物址は２間×３間で南側に廂をもっている。これらの遺跡は掘立柱建物址を北端として調査区の南部台地平端面から緩斜面部に集まっており，周辺には同時期の土器片が散布している。

近世の遺構としては，道路11条，溝３条，台地整形による墓域２ヶ所，土葬墓18基，火葬墓34基が検出された。道路は調査範囲内の地割とほぼ一致しており，調査区を取り囲む様に廻っている。墳墓群はこの地割りによって群別され南西部には土葬墓が，中央南寄りには火葬墓が群在している。これらの墓からは六文銭としての貨幣を出土しており，渡来銭系貨幣のみを出土するものと，古寛永通宝のみを出土するものとに区別される。土葬墓は前者のみ，火葬墓は両者半々である。また，調査区北側に隣接して元禄年間を最古の墓標とする墓地が現存しており，今回調査された遺構群に連なっているものと思われる。

その他に，時期不明の遺構として土壙６，溝２，石器群１，性格不明遺構１が検出されている。

以上の様に小田部新地遺跡は先土器から近世までの複合遺跡であるが，弥生時代中期以降，小田部古墳・荻作１号墳なども考慮すると奈良・平安時代までの間，連続した生活の痕がうかがえ，特に古墳時代における珠文鏡の出土は有力な勢力の存在を示している。これは前面に広がる神崎川沖積地が適当な広さを有し，また短水系で谷津田の発達も良好であったため用水管理の上から水田経営が容易であったためと思われる。いずれにしても海岸平野や河川本流下流域に占地する有力集団と，台地の奥に位置する集団との関係を検討する上で本遺跡は良好な資料となろう。

4　能満番面台遺跡（確認調査）

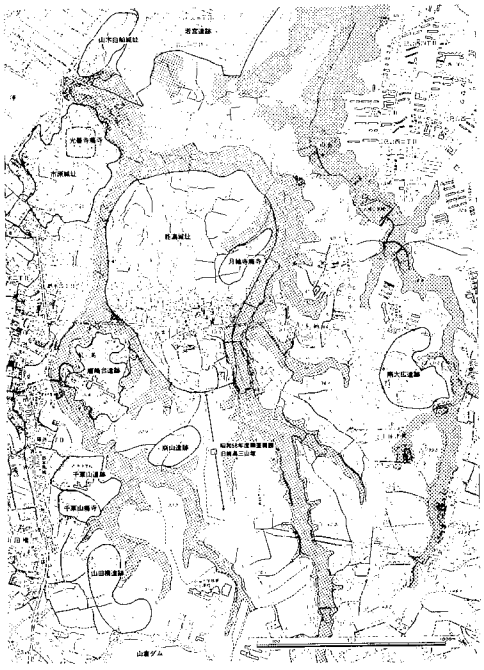
所在地　市原市能満1405－4地先ほか

調査期間　昭和58年10月1日～昭和58年10月27日

調査面積　5,800 ㎡のうち10％ほか

調査概要　本遺跡は，県道五井本納線を，大字能満から南下して山倉ダムへと抜ける，市道114号線の拡幅工事に先行して行われた事前調査である。調査は当初，旧能満三山塚の一部本調査と，他の全域に対する確認調査という形で開始されたが，工事の緊急性により，逐次本調査へ移行するという，極めて変則的な方法によって進められた（第2図）。

本遺跡の所在する能満台地付近の地形を概観するならば，市域のほぼ中央部を北西に貫流する養老川と，北辺を流れる村田川に挟まれた洪積台地で，樹支状に開析した支谷群によって刻まれており，極めて複雑な地形景観を呈している。



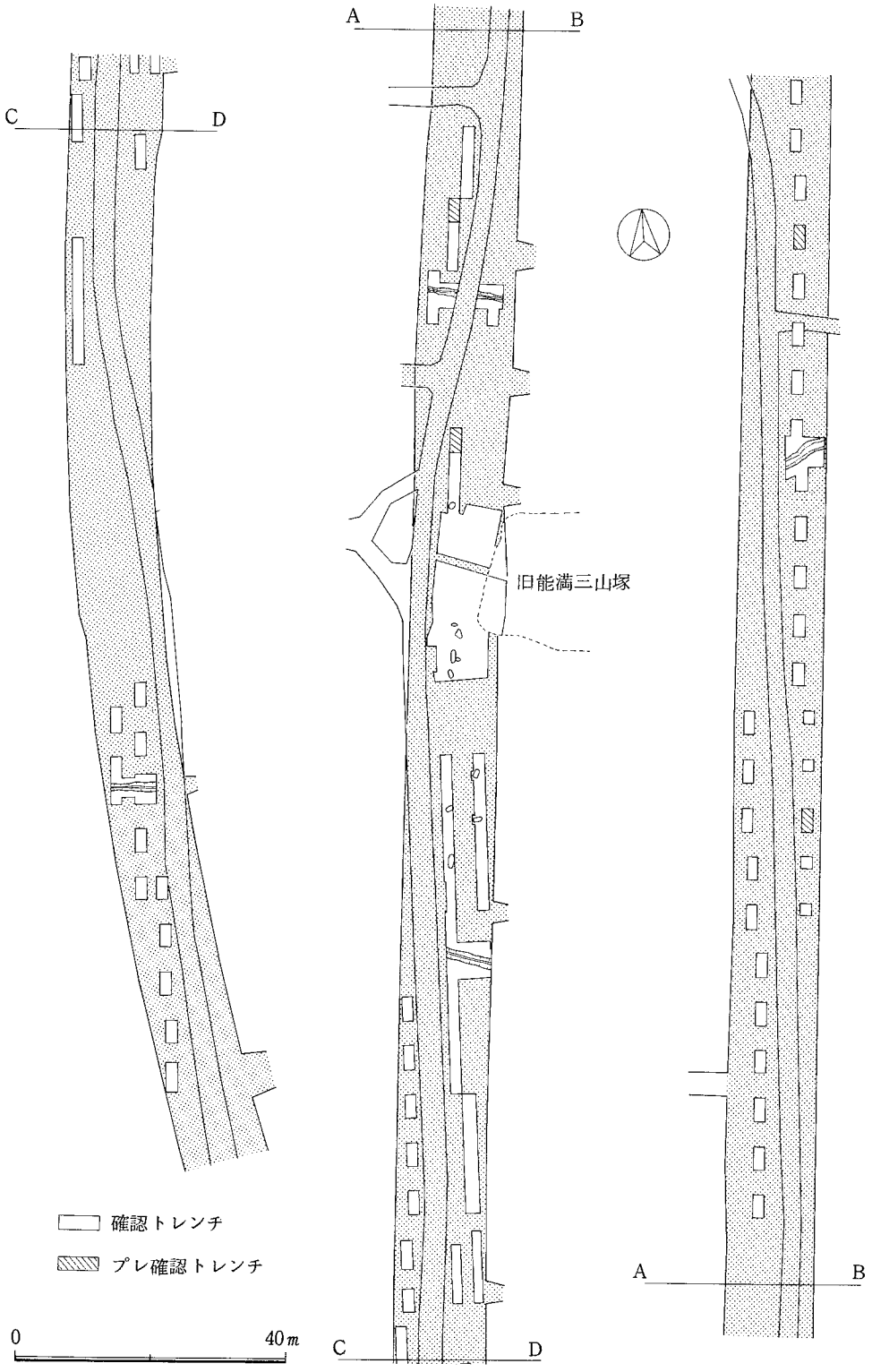
第1図　遺跡周辺の地形及び考古学的環境

遺跡周辺の考古学的環境としては，本台地上の北辺に所在する能満城址をはじめとし，西側には縄文時代～歴史時代に及ぶと目されている崩山遺跡，弥生時代後期の集落が確認された唐崎台遺跡があり，また，東西の支谷を隔てて，西側には古墳時代から平安時代に及ぶ千草山遺跡が，東側には南大広遺跡などが存在している（第1図）。

調査時の現況は，北辺部が耕作地であり，他は概ね，山林・荒蕪地であった。調査の方法は文頭で述べた通りの変則的なものであったため，任意座標による工事用センター杭を基準とし，これに平行するような割り付けトレンチによって実施した（第2図）。

確認された遺構は，溝状遺構4，炉址4，土壙4，陥し穴状遺構2の計14ヶ所であり，これに旧能満三山塚の一部本調査を加えたものが，今回の調査結果である。

以下，時期のわかるものを中心に，いくつかの遺構を取り挙げて概略を記しておきたい。



能満番面台遺跡調査範囲図

No.1，No.2，No.13，No.14はいずれも溝状の遺構である。このうちNo.1では，本年報の「石川城址」に記載されているものとほぼ同様の焙烙と考えられるものの口縁が出土しており，No.2では，鉄滓一点のほか，覆土上層部より馬歯が数本出土している。また，No.14からは高台付の須恵器片が出土している。各遺構とも共伴する遺物が少なく，小片であるため時期を決定する資料としては不十分であるが，No.1，No.2については能満城址などとの関係を，また，No.14に関しては千草山遺跡や南大広遺跡などとの関係を検討しておく必要があるものと考えている。

No.4，No.5，No.8はいずれも炉穴である。このうちNo.4では遺物の検出が認められなかったが，他は縄文時代早期のものと考えられる土器片が出土している。いずれも浅く小規模の炉穴であり，No.4についても覆土が他のものと類似していることから，ほぼ同時期の遺構ではないかと考えられる。

No.6，及びNo.10は陥し穴状遺構である。両方とも長丸の楕円形でV字に底が狭くなっており，底部に小ピットを有している。No.10では覆土中より縄文時代早期のものと考えられる土器片が出土している。

旧能満三山塚について　市原市内における出羽三山信仰は，養老川流域を中心として根深く浸透している。市内最古の三山碑としては，寛文三年（1665）のものが知られており，中世において発展していた熊野信仰と併せて考えるならば，山嶽信仰が市原に古くから定着していたものと思われる。市域の出羽三山信仰では，行人になることによって，俗人とは別の一段高い位階に進むという信仰があり，村の会合，葬儀などといった行事においても，上位の人として重要な役割を果たしてきた。旧能満三山塚もこのような出羽三山信仰の中で構築されたものである。当三山塚は，概測一辺　21mを計る方形の三段塚であるが，第2図に示したとおり，西側に面する下二段が工事範囲に若干かかることから，調査の対象となった。このため，調査範囲内の形状を50cmコンターによって計測し，爾後，当三山塚が古墳の改刪によるものか否かという点に主眼を置いて調査を行なった。特に，三山塚西側の調査範囲内に周溝の有無を求めたが周溝は認められず，旧能満の地に続く月山信仰の記念物として構築されたものであることが明らかとなった。尚，当三山塚には，「明和四丁亥天　願主溡円　奉納六拾六部□（亥カ）廻國供養佛　奉爲供養湯殿山行者　十月吉月　同行九人」「湯殿山（月山）大権現（羽黒山）　寛政十戊午十月廿八日　能満村　同行十九人」「文政三庚申辰□（天カ）八月十三日　願主三十五人　湯殿山（月山）供（羽黒山）喰塔　開眼大尊師　釈藏院盛運」の銘をそれぞれに刻む石碑が建てられている。

5　上総国府跡推定地（確認調査）

所在地　市原市村上1402～15番地

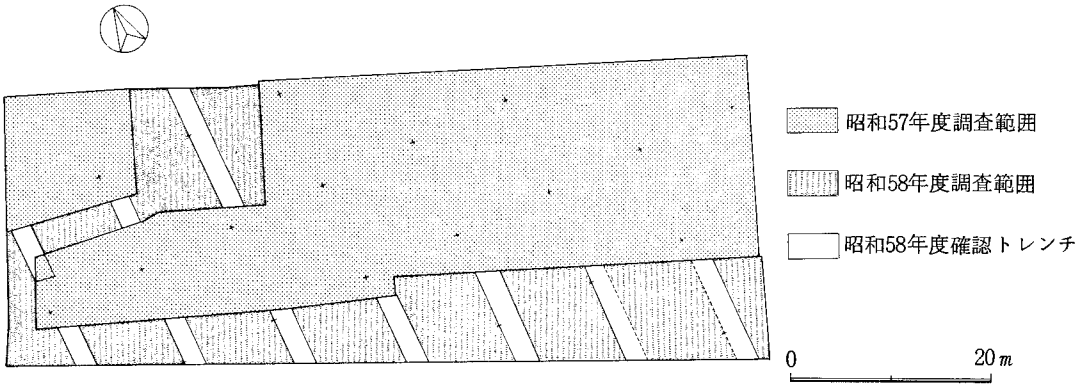
調査期間　昭和58年３月１日～昭和58年３月31日（第一次調査）
昭和58年７月２日～昭和58年７月19日（第二次調査）

調査面積　第一次調査 1,400m²の10%，第二次調査 780m²の10%

調査概要　上総国府の所在地については，従来より数説の論考を得ており，概ね惣社，市原，能満，村上の四説に要約することができる。しかし，ここ数年来の国分寺台に於ける発掘調査や国府研究の成果を踏まえ，総括的に整理するならば，上記四説が必ずしも併立しているとは言い難い。すなわち，能満説については，中世における国府跡であると考えられており，また，惣社説については，昭和47年より進められてきた国分寺台の発掘調査によってその論拠を失うに至っている。従って，律令時代の国府所在地としては，市原説と村上説との二説を有力視することができる。

今回，「上総国府跡推定地」として確認調査を行なった地点は，このうちの村上説（須田，1976）の府域推定地内に該当しており，市域のほぼ中央部を南から北へ貫流する養老川の下流域，三角デルタ地帯の右岸に広がった微高地に位置している。（本書巻頭市域図及び図３参照）

調査は，市立国府小学校の校舎改築工事に先行して行なわれたものであり，昭和57年度，昭和58年度，昭和59年度の３ヶ年度に渡って実施された。（以下，昭和57年度調査から，第一次調査，第二次調査，第三次調査と仮称する。）このうち，第三次調査については，布目瓦４点を含む遺物が出土したほか，中世の村上城址に関連すると考えられる堀跡などが検出された。



昭和57・58年度調査範囲図

第一次調査と第二次調査では，国府跡に関するものをはじめとして，遺構・遺物などを全く検出することができなかった。以下，調査概要を略記し，その後に若干の問題を提示して，今後の調査・研究に資するものとしたい。

調査時の現況は，第一次調査区域の大半が小学校のプール跡地であり，第二次調査区域の北側一角が民家であって，他は旧校舎跡地で，取り壊した後に若干の客土をして地ならしした仮設グラウンドの一部であった。調査の方法は，磁北を基準とする任意座標によって10mピッチのグリッドを設定し，調査範囲の約10%を目度にトレンチを配して確認にあたった（図1）。

土壌は，各トレンチによって多少の相違が認められたが，概ね，仮設グラウンド設置の際に客土した黄土色の砂質土直下から，過剰水によるグライ化の進んだ青灰色土が観察された。基本的には砂質であるが，土粒がきめ細かく，保水性が高いように思われる。明治14年以後の地形図によれば，今までに水田の営まれた形跡がなく，このことにグライ化の発達と地表下50～80cm程度のところで観察された地下水の湧出を考え合せると，比較的に浅い位置で安定した状態の地下水系が発達しているものと考えられる。

昭和58年度調査範囲遠景

調査の結果については，既に述べたとおりである。すなわち，第一次調査においては当該区域にプール跡地が含まれていたこともあってか，遺構・遺物ともにまったく検出されなかった。また，第二次調査では，調査範囲の東側トレンチ断面において，深さ1m程度の緩やかなカーブを描く溝状の堆積が認められたものの，拡張して性格の判明に努めたが，該当している地点が，数度に及ぶ校舎改築によって攪乱を受けていることもあって，明らかにすることができなかった。従って，第一次調査，第二次調査ともに，村上説を裏付ける資料を得ることができなかった。

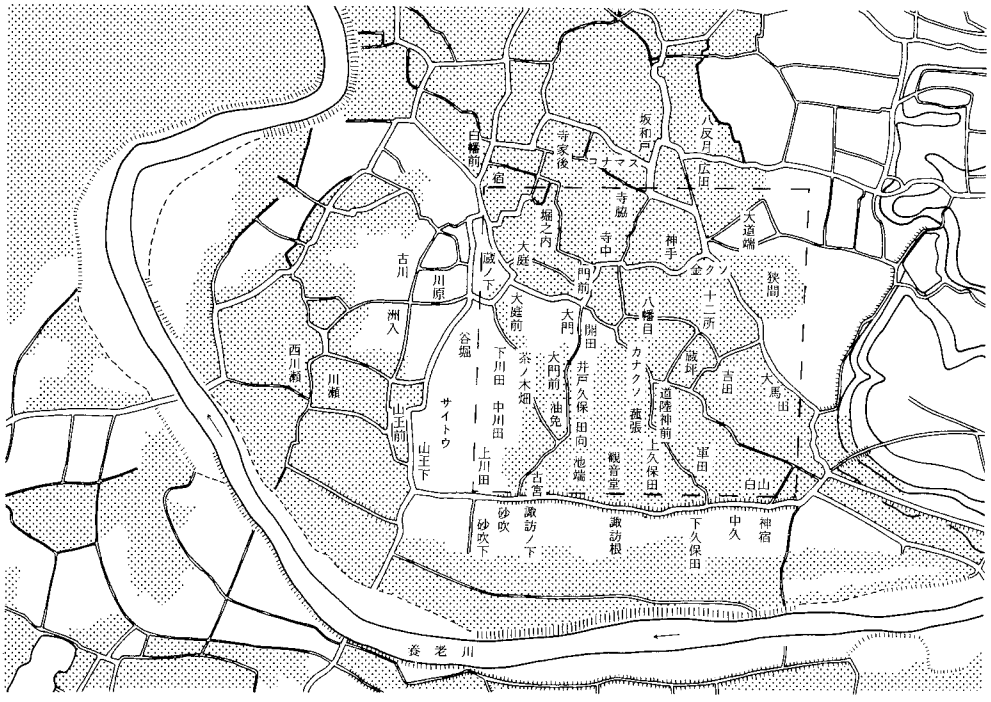
以上が，今回の確認調査概要である。そこで次に，これらの結果を踏まえ，今後に残された問題点について二・三触れておきたい。

上総国府の所在地については，倭名抄に「市原郡」とみえており，おおよそ村田川・養老川・東京湾を境として囲まれた範囲内にあたるとされている。他方，律令的行政機関としての国府は，計画的に設計された地方都市として，律令統治に係わるあらゆる事柄について，地方社会の

中心的位置にあることを指向しており，従って所在地についても，それらの諸事象に対して，機能的役割を確保し得る地に選地されたものと考えられる。殊に，水陸交通路との関係は重要な立地条件と考えられ，上総国では各所に設置された駅と共に，養老川の果たした役割は大きいものと想像される。また，律令確立期の国府は，機能性はもとより，中央指向型の意識からも方六町なり八町なりの広がりを強く求めたものと想像される。

以上のことから，上総国府の所在地を「市原郡」内の海岸低地に求めるとするならば，都市建設の観点から考えて微高地に選地することは当然のことであり，須田の推定地を含む村上の地以外には考え難い。

次に，今回の調査区域についてであるが，当地点は大正6年に作成された3000分の1縮尺の現形図によると小字名「大庭」に位置しており，国府推定地の中軸線にあたる「門前」「大門」よりもやや北西に位置している（図3）。このことから，もし「大門」が須田説（1976）に言う国府の「南大門」があった位置であるとするならば，当地点は，国府域からはずれている可能性もあり，前述調査概要のような結果になったものと考えられる。しかし，客観的な評価は，周辺部の調査結果を待つよりほかなく，今後は推定府域全体をカバーし得るようなグリットのの設定を行ない，個々の成果が全体の中に写像し得るような方法で，有機的に調査を進めていく必要があると思う。



第3図　上総国府跡推定域周辺の小字

最後に，本概要文頭で触れた市原説と村上説との関係について，現在までの調査結果などから簡単に触れておきたい。

市原説は，先に挙げた倭名抄の記述を大字「市原」周辺に求めたものであり，平野元三郎による小規模の発掘調査も行なわれているが，郡本の市原郡衙推定地や能満説との混乱もあって，いまだ明らかとはなっていない。市原説について須田は「この市原台は東西幅約200m程の舌状台地で，東に幅約100m程の谷が侵入し，西は海岸平野と約20mの隔絶があり国府の立地としては良好とは言えない。----（中略）----国分寺との位置関係や惣社の地名などを考えると，極めて微視的な把えかたと言わざるを得ない。[註1]」として否定的な見方をしている。

しかし，郡本には地番変更以前，「古甲」という「古国府」に通じる小字名が存在しており，中世の能満国府説を認めるならば，これに対する古国府として，充分に再考を要するものと考えられる。

この場合，村上説との関係が問題となるが，国府は，先に述べたとおり律令的行政機関としての機能的な性格を有するものであるから，律令体制の推移に応じて，あるいは他の理由から機能性を失うことによって，移動する可能性があると考えられる。譬えば，海岸低地に選地したと考えられる村上推定地の場合，養老川の水運と中央指向型の設計などから立地したとしても，恒常的な機関の立地条件としては，必ずしも好適地であったとは言い難い。何故ならば，推定府域の西南部には養老川の旧河川流路がかかっており，これが古代に於ける養老川の氾濫によるものではなかったにせよ不安定な要因は潜在していたものと考えられるからである。また気候的にも5世紀から12世紀に至る時期は，海進の進行した時期でもあり，今回の調査によっても，非常に浅い所で地下水系の発達が観察され，必ずしも安定した立地とは言えないように思われるからである。

他方，行政機関としての国府による律令支配の特質を考えた場合，国司は百種にも及ぶ文書を中央へ送付しなければならなかったものの実務的な作業は郡司に負う所が多く，文書の作成や筆写も徭丁による役のひとつとして考えているなど，地方豪族の支配力を利用して律令体制の確立に努める郡司主導型の律令体制であったと考えられており，国府が方八町なり六町なりの面積をひとつの広がりとして必ずしも確保する必要がなかったようにも考えられるのである。であるとすれば，市原説も論外にはできず，このことから再び市原説と村上説との関係を考えるならば，確立期に村上に選地された国府が，その後，郡本の「古甲」周辺にうつされたとも考えられ，今後，上総国府の研究を進めていく場合，市原台地周辺についても，村上推定地同様充分考慮していく必要があるものと考える。

註(1)　須田　勉「上総国府の諸問題―特に所在地をめぐって―」『古代 第61号』　1976

6 天神台遺跡

所在地　市原市村上1018他

調査期間　昭和58年4月1日～昭和59年3月31日

調査面積　30,000㎡

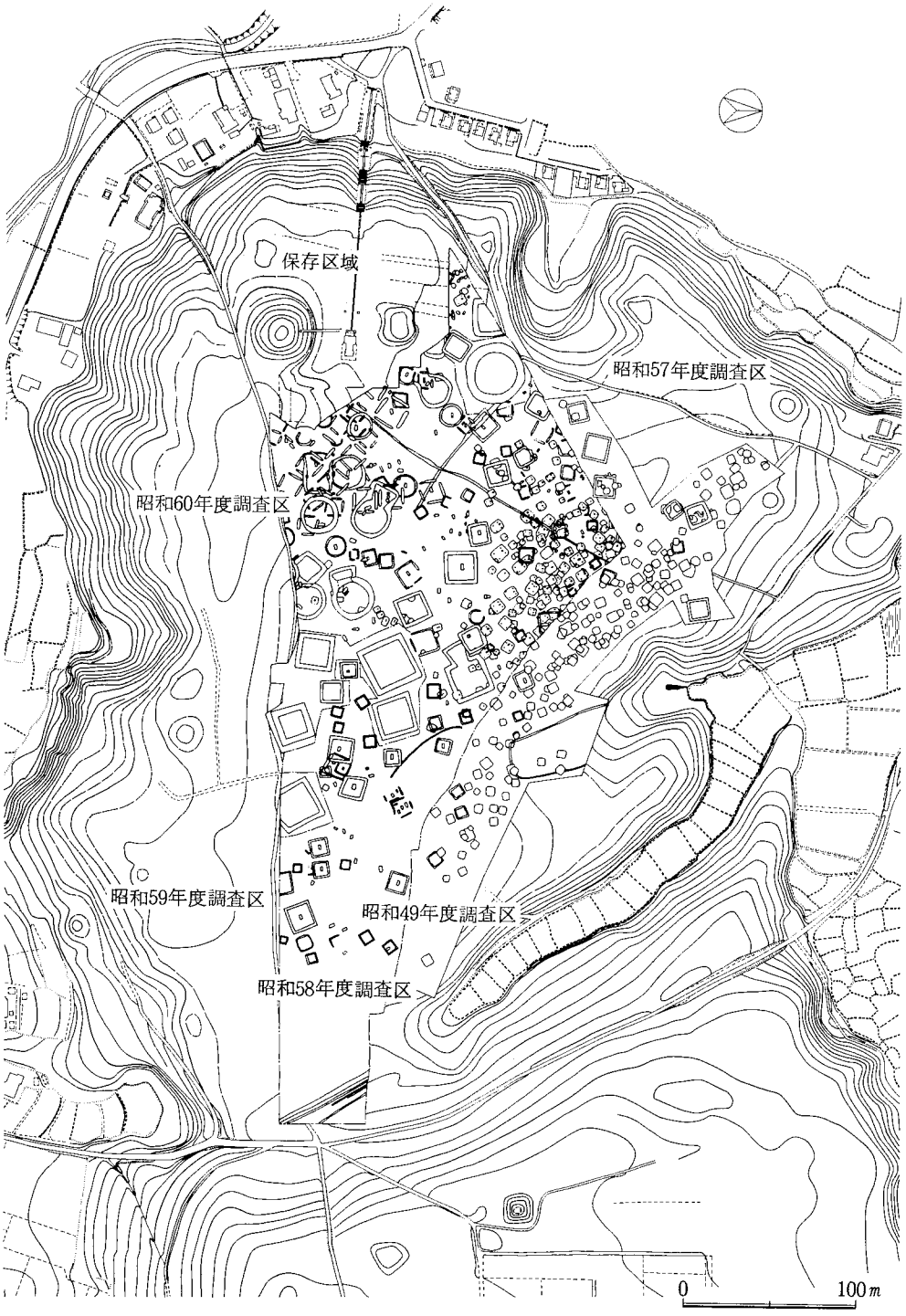
調査概要　天神台遺跡は，上総国分僧寺・尼寺跡を主体とする上総国分寺台遺跡群の東西隅に在る南北 500m，東西 600mほどの三角形の台地上に位置する。台地南・西眼下には，北流してきた養老川が西に向きを変え東京湾に流れ込み，また養老川の開析した肥沃なデルタ地帯を見下すことができる。小支谷を挟んだ北側台地には，前期古墳で知られる神門古墳群や上総国分僧寺跡が，また東側台地上には東間部多古墳群が所在する。天神台遺跡の所在する当台地上には，他に諏訪台古墳群が周知の遺跡として知られ，台地の南側に東西に貫く道が在り，これより南側と諏訪神社付近と台地西側縁辺部に点在する古墳群を諏訪台古墳群と総称し，古道より台地北端までを天神台遺跡と総称している。また天神台遺跡内に点在する盛土を有する古墳も諏訪台古墳として遺構番号を与え調査を行っている。

当台地の調査は，国分寺台宅地造成工事開始当初より断続的に行なわれ，それぞれ概要が報告されている。今年度の調査区域北側は昭和49年と57年度に市原市教育委員会と国分寺台調査会が調査を行ない，弥生時代後期から古墳時代前期の集落を主体とし，また中央部南側は終末期の方墳群の集中する地域であることがそれぞれ明らかにされている。

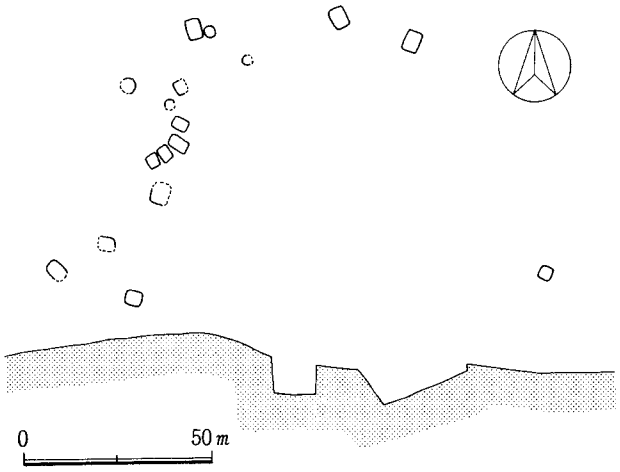
58年度の調査では，縄文時代早期包蔵地1ヶ所と炉穴14基，縄文時代前期包蔵地1ヶ所と住居跡17軒，弥生時代中期住居跡1軒・方形周溝墓20基，弥生時代後期の方形周溝墓7基，古墳時代前期（五領期）の方形周溝墓1基，古墳時代後期～終末期の円墳10基（円形周溝も含む）・前方後円墳3基・方墳12基，奈良・平安時代の方形周溝23基で，他に時期不明の土壙14基＋・溝6条を検出し調査を行なった。

縄文時代早期の炉穴は，調査区の西端部に集中し検出し，保存区域である諏訪神社付近に主体を置くものと考える。出土遺物は礫石や条痕文を有する茅山期の土器が出土することから，この土器を持って帰属年代をあたえられる。

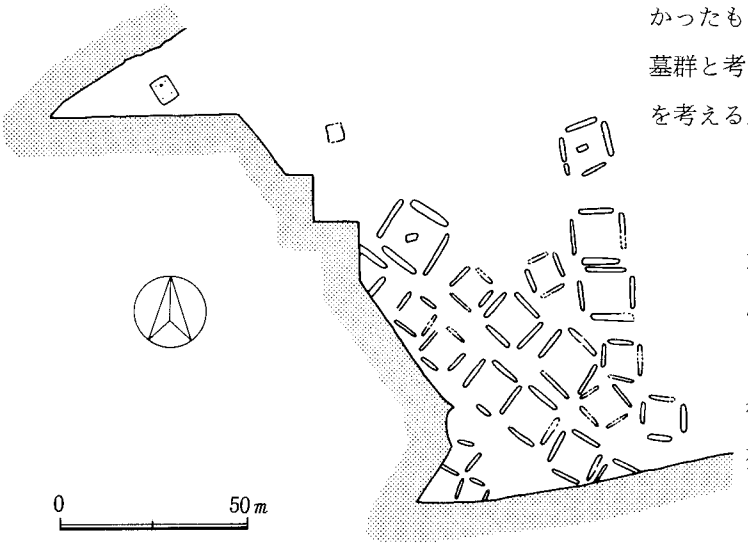
縄文時代前期の住居跡は，調査区域のほぼ中央部に径 130mの半円弧状に17軒を検出し，南半分は調査区域外に存在するものと考えられ，本来は環状に巡る集落跡であろう。住居跡の平面形や出土遺物から前期の関山期の所産である。出土遺物には土器の他に，抉状耳飾り・打製や磨製の石斧などがある（第1図）。



天神台遺跡・諏訪台古墳群全体図



第１図　縄文時代前期住居跡（関山期）配置図



第２図　弥生時代中期遺構関連図

弥生時代中期の住居跡は，調査区西端の前方後円墳（4033）下層より検出した１軒だけである。これまで当台地上で検出した中期の住居跡は，今回検出地点の西方40mに57年度に検出した１軒だけで，集落の存在を考えるならば保存区域の諏訪神社やその周辺の台地南西部に存在が推測される。当台地の弥生時代中期集落の存在は，本台地の立地が養老川の開析した肥沃なデルタ地帯や東京湾に面する底地帯を一望できる事等の好条件からある程度推測されていたものの，今まで確認できなかったもので，今回検出した方形周溝墓群と考え合せ本地域の弥生時代社会を考える上で貴重な資料である。

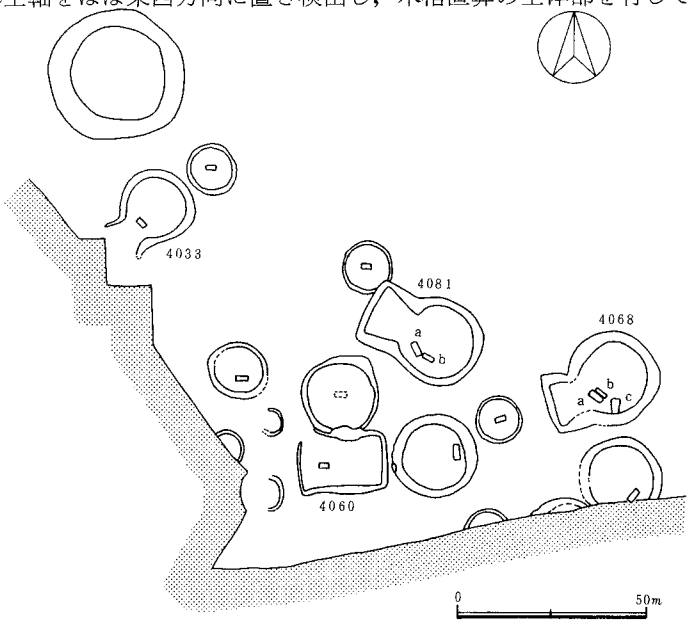
方形周溝墓は20基を検出し，うち16基を完掘した。その主軸方向より座標北と北より－45°振れるものの２群に分けられ，前者は南北に１列に，後者は北西から南東方向に２列配置され，後者が先行するものである。規模は外径で９～17mほどを測り，平面形は四隅にブリッジを有するものがほとんどであるが，四隅にブリッジを有し，更に一辺の溝にブリッジを有するものの２種類ある。埋葬施設は５基より検出し，土壙墓２基と壺棺を伴うもの３基で副葬品は検出されない。

弥生時代後期の方形周溝墓は７基検出し，調査区西端（4033下層）に１基（久ケ原），中央部に６基（弥生町）で，集落とは区画され占地する。久ヶ原期のもの１基は，四隅で漸移的に深さを減じているものの溝は全周し，主体部は中央に主軸方向に検出し木棺直葬である。弥生町期のものは基本的には久ヶ原期のものと同一であるが，中には複数の主体部を有するものや

溝を共有するもの，また拡張などしているものなどがある(第２図)。

古墳時代後期より終末期の古墳は，円墳10基・前方後円墳３基・縦形の方墳１基・方墳11基があり，奈良・平安時代では方形周溝墓22基を検出した。

円墳は７基を全掘し，３基は調査区域外に跨り部分的な検出である。規模より３グループに分けられ，外径 7.5～ 9.5m（A群）クラス３基・12～15.5m（B群）クラス３基・21～22.5m（C群）クラス４基である。A群は主体部や盛り土を確認できない溝だけの検出で，円形周溝として取り扱われているものである。溝は浅く，途中で途切れるものもある。出土遺物は１基より，土師器杯を出土しただけで個々の年代を決定できないが，杯は６世紀末～７世紀初頭に位置づけられるものである。B群は盛土を確認できたもの１基の他は不明で，主体部はそれぞれ主軸をほぼ東西方向に置き検出し，木棺直葬の主体部を有している。副葬品には，金銅製耳環・鉛製耳環・コハク玉・ガラス小玉などがあり出土遺物より７世紀前半に位置づけられる。



第３図　古墳時代円墳・前方後円墳配置図

C群は，盛土をほぼ全体に削平されるものの，わずかに中央部で盛り上がる旧表の存在から確認できる。4070は外径21mを測り，主体部をほぼ中央に東西方向に主軸を置き検出する。4061は外径22.5mを測る。主体部を東側溝に接し検出した変則的古墳であるが，既に削平さている盛土中にも主体部の存在したことが考えられる。主体部は木棺直葬で，副葬品は直刀２振である。周溝内よりの出土遺物は極めて少ないものの７世紀前半に位置づけられよう。4066は外径22mを測り，南側の一部が調査区域外に有る他はほぼ全掘した。盛土及び旧表面を削平され表土直下にわずかに旧表を残すにすぎないが，南東部よりロームをわずかに掘り込む木棺直葬の主体部を検出した。副葬品は，金銅製耳環１対と刀子１口である。出土遺物が極めて少ないため時期の判別は困難であるが，周辺の状況より７世紀前半を中心とした時期に位置づけされるものと考える(第３図)。

前方後円墳は３基検出し，円墳の北側に主軸方向を異にしそれぞれ配置される。4033は南西に前方部を開き，主軸長24m・後円部外径20mを測り，前方部はくびれ部よりわずかに張り出

し，周溝は開いている。盛土の有無は，旧表が後円部中央でわずかに厚く堆積することなどからその存在を感じ取るにすぎない。埋葬施設はくびれ部よりやや後円部よりに軸線を主軸方向に対して直角に置き検出した。主体部は木棺直葬で，副葬品は金銅製耳環１対・瑪瑙製勾玉13・ガラス小玉などである。出土遺物が極めて少ないため時期限定の決め手に欠けるが，周辺の状況より６世紀後半に築造されたものと考える。

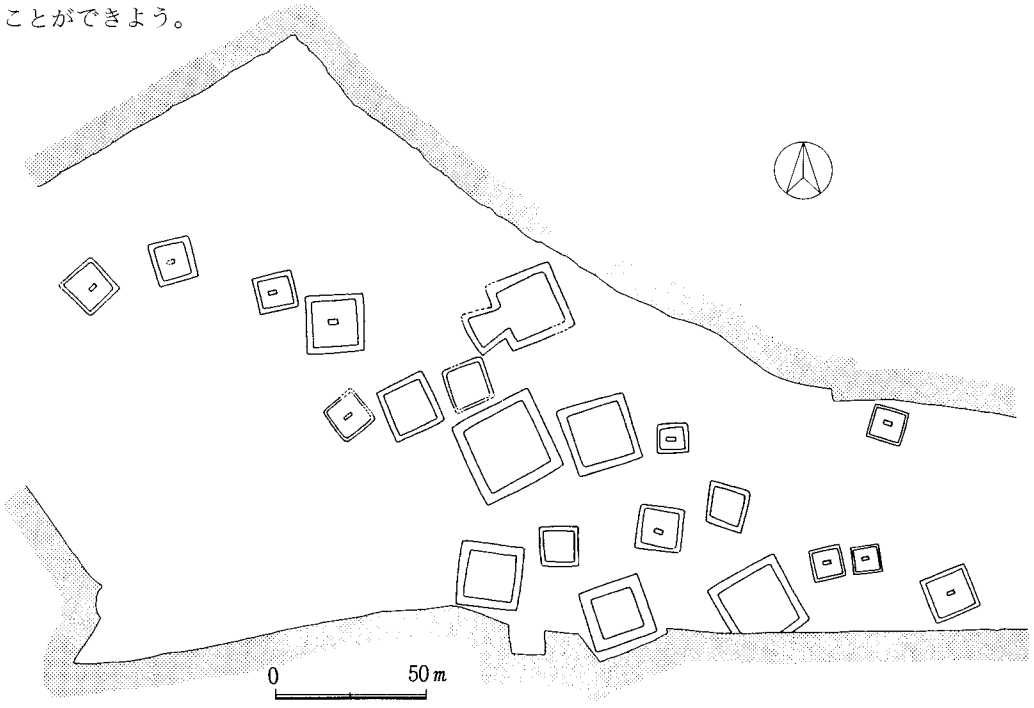
4081は前方部を西北西に向け，主軸長32.5m・後円部外径26mを測る。盛り土は削平されており，旧表の状況より感じられるにすぎない。墳形は前方後円墳を呈するものの，周溝は後円部を一周して全掘し，後に前方部をくびれ部より付けたして掘り込み，前方部と後円部の間は版築状に埋めもどしている。埋葬施設は２基検出したが，盛り土が総て削平されることから，盛り土中に主体となる埋葬施設の存在した可能性もある。検出した埋葬施設２基には積極的な客体的根拠は見い出せないものの，２基は掘り方を切り合っている。くびれ部寄りの（a）は，後世の攪乱により大きく掘り込まれているが，直刀２振が出土し，その東側の（b）からは琥珀玉とガラス小玉を出土している。両方とも木棺直葬で，前後完成はa→bである。

4068は前方部を西南西に向け，主軸長31.5m・後円部外径25mを測る。構築過程は4081号墳と同様に後円部を全周した後に前方部を付けたし，後円部の溝を埋めもどしている。埋めもどしは4081号墳より雑で，黒色土で埋めもどしてるにすぎない。盛り土は，削平されているものの，後円部中央付近では10～20cmほど残している。埋葬施設は３基検出し，後円部の前方部よりに２基（外よりa→b）・後円部南側周溝に接して箱型石棺（？）１基（c）を検出した。a・bは木棺直葬で，掘り方が切り合いa→bの前後関係にある。副葬品はaより金銅製耳環２対，bからは金銅製耳環が１対出土しただけである。cは表土直下にその石材片を散在して確認し調査前から後世の攪乱が推測され，調査の結果部分的に壁材を残すだけで，床もほとんど破壊されていた。出土遺物は乏しく，時期を限定しうる資料がないものの，北側くびれ部付近の周溝中位より平瓶が出土しており，これより６世紀後半に位置づけ可能とも考える。

前方後円墳３基は，その所属時期を明確に限定できる資料を欠くものの，4033→4081→4068と言う大きな時間的流れを指し，当台地上における他の墳形と同様な時期的流れの占地状況（西側が古く　→東側が新しい）をうかがうことができる。その中にあって4060は突如として出現する異質の古墳である（第３図）。

4060は調査区南西部の円墳や前方後円墳の密集する地域に，主軸方向を東西に置き占地する縦長の方墳を思わせるもので，主軸長24m・短軸長17.5mを測り，周溝中央部にそれぞれくびれ部の様な溝の広くなる部分を有し，西側に開く前方部を有する墳形を呈し，特異な墳形である。盛り土はすでに削平されないが，中央に行くにしたがって旧表が厚くなることから，その存在は推測される。埋葬施設は２基検出し，１基は北側のくびれ部状に溝の広くなる位置に，

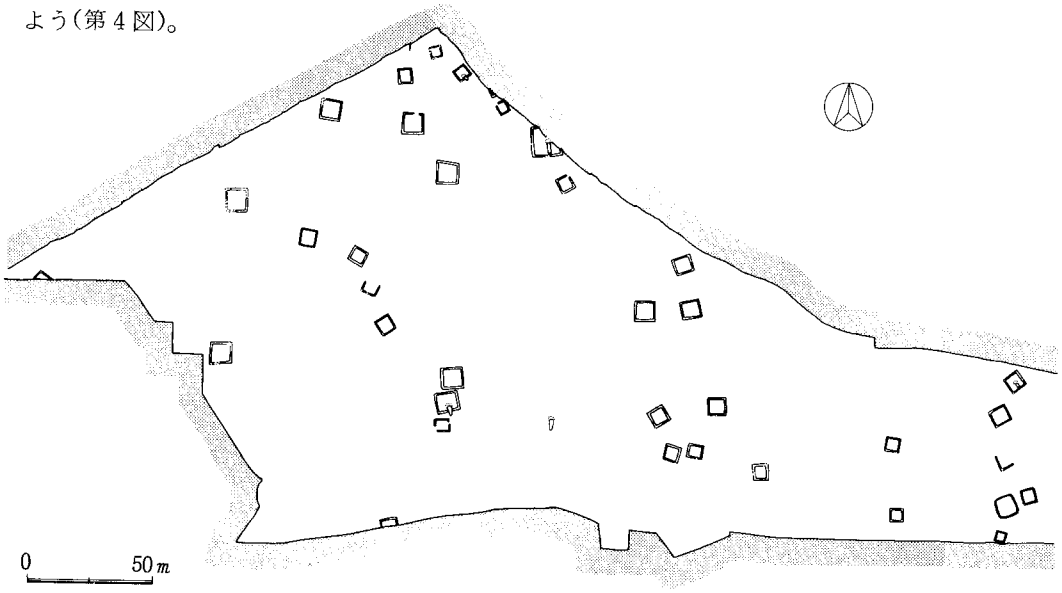
周溝内側壁面を切り込んで土壙墓（b）を，もう1基はほぼ主軸線上に中央よりやや西側に木棺直葬の主体部（a）を検出した。aからは直刀2振・鉾先1・石突1・金銅製耳環1・鉄鏃など副葬品として出土し，また木棺に使用した釘類が良好な状態で検出した。土器は，須恵器がほとんどで杯身と蓋を出土している。杯身は，口径 8.5～ 9.5cm前後で器高 3.3～ 4.5cmを測る6～8個体で，体部外面は底部より回転篦削り調整によって仕上げられ，1個を除き身にはかえりはない。蓋は6個ほど出土し，乳頭形のつまみやかえりを有することを特徴とし，蓋杯の形態が逆転する時期のもので，陶邑編年のIII型式第1段階にあたるもので，7世紀中葉を中心とした時期で考えられるもので，この須恵器杯と蓋を持ってこの古墳の築造年代をあたえることができよう。



第4図　古墳時代方墳配置図

方墳は11基を調査し，円墳や前方後円墳の占地する北→東側に大きな流れを有して配置されている。盛土を残し現況で古墳であると確認できるものは，54年～56年度の調査ですでに調査されており，今年度はすべて盛り土を削平されたものばかりである。今年度調査分の11基の盛土の存在は不明であるが，旧表の状況や前年度までの当地域での古墳の調査成果より考えて，盛り土されていたことはほぼ確実であるが，比較的低墳丘のものが多かったものと考える。一辺17mを越えるものは，埋葬施設棺底を盛土中や旧表中に置くのに対して，一辺15m以下のものはロームを深く掘り込んで棺底を置きロームへの掘り込みは1m以上のものもある。埋葬施設は9基より検出し，小型化するものの方が検出率は高く，このことは盛り土の高さにも大いに関係することと考える。主体部は確認したほとんどのものがほぼ東西方向に主軸を置き，木棺

直葬である。副葬品は，今回の調査においては全ったく無く，本台地上に構築された方墳で副葬品が出土した例としては，56年度に調査を行った173号墳のガラス玉19，58年度の5号墳のガラス玉31点を挙げるにすぎなく極めて貧弱である。土器などの遺物も須恵器杯・長頸壺などあるものの副葬品同様貧弱で築造年代を個々に明らかにできない。しかしながら，周辺の状況や数少くない遺物から是等方墳の築造年代は7世紀後半から8世紀初頭に所属年代をもとめることができよう(第4図)。



第5図　8世紀以降方形周溝状遺構配置図

方形周溝22基は調査区域内に散在的に検出し，それまでの古墳の占地状況とは全く異質のあり方と言える。

規模は一辺4m～12mのものまであるが全体としては6～7m前後が大多数を占める。形態は溝を巡らしただけのものや，内部施設を有するものなどさまざまである。（溝だけの遺構の場合は方墳の小型のものと判別が難しいが，方墳の小型化する場合は木棺直葬の主体部を有し，当該地域の方墳の形態をそのまま残すものだけを方墳とし，木棺直葬の内部主体部を有しないものを方形周溝とした。）内部施設は2基より検出し，57年度調査時にも2基確認している。この施設は四辺のうちの一辺の溝の中央部を掘り込んで階段状の竪穴を設け，階段底面より横穴を掘り込んで玄室としているもので，初期の地下式土壙と酷似しているものである。この玄室からは57年度調査分の1基から再葬された人骨1体を検出している。また，方形周溝の中央部に火葬骨と思われるものを出土した土壙状の埋葬施設を有したものもある。また年代観としては8世紀中葉～9世紀前半と考える(第5図)。

まだ整理途中でもあり，また60年度に南側隣接の諏訪台古墳の調査中であるので，本遺跡の概要は諏訪古墳の調査進行に合せて詳細を報告したいと思います。

7 池ノ谷遺跡

所在地　市原市山倉字堂後 501－1他

調査期間　昭和58年8月29日～昭和58年9月30日（確認調査）

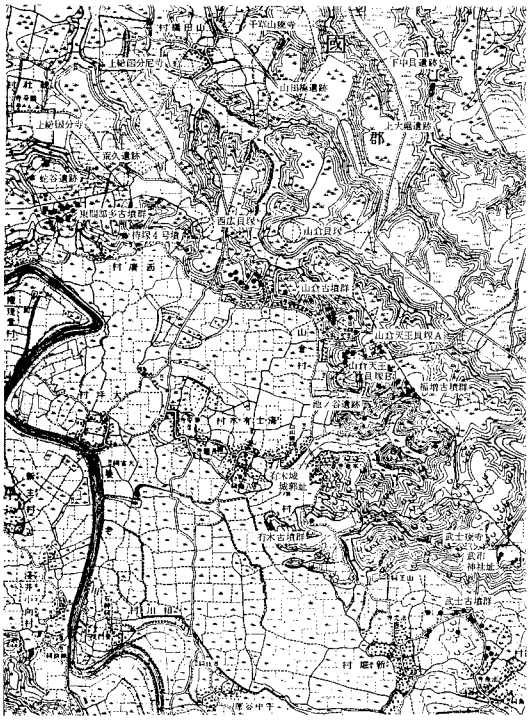
昭和58年12月1日～昭和58年3月31日（本調査）

調査面積　1,700 ㎡

調査概要　房総丘陵を浸蝕・蛇行しながら北上する養老川は，大坪・海士有木の地で，下流のデルタ地帯へと流路を変える。今回，調査を行なった池ノ谷遺跡は，この大坪・海士有木の東側，養老川の右岸を中流域から南北に走行する洪積台地の縁辺にあたる，市原市山倉字堂後に所在している。

調査は，本年報掲載の福増遺跡と同様，新設された福増清掃工場への搬入道路建設に先行して実施したものである。

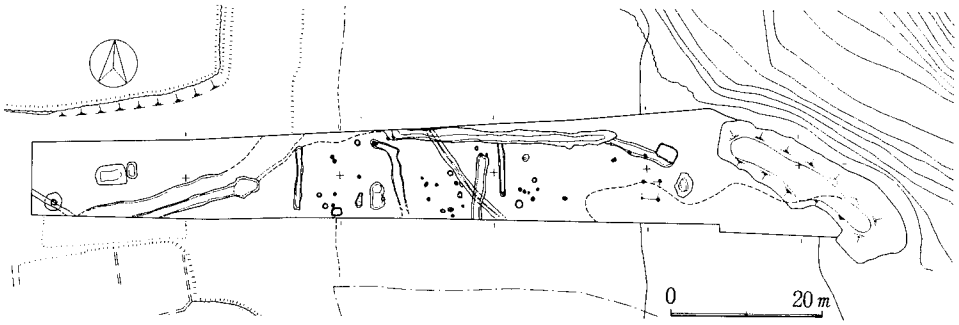
当地は，洪積台地の開析作用によって形成された小谷の先端部に拡がる微高地であり，分布調査等によって，須恵器片および土師器片が表採されていた。



第1図　池ノ谷遺跡周辺の地形及び考古学的環境

周辺の考古学的環境としては，近接する海士有木の微高地上に，古墳時代の土師器片・須恵器片等が散布しており，その他に中世の有木城址が知られている。殊に昭和54年には，海士遺跡の調査によって有木城の外郭敷設と推定される柵列が検出されている。また洪積台地上には福増古墳群を包括する福増遺跡をはじめとし，山倉天王貝塚・山倉古墳群が分布しており，北方には，上総國分寺・國分尼寺周辺に拡がる国分寺台の遺跡群を見渡すことができる。その他の遺跡としては，東方に山倉貝塚や山田橋遺跡が，また南方には武士古墳群や武士廃寺址などが分布している（第1図）。

調査時の現況は，西側の一部が耕作地であり，他は荒蕪地であった。調査区の東端には，比高差 2.5m程度の長円形の小丘があり，開析谷を浸蝕・透過してきた湧水は，この小丘と北側



第２図　池の谷遺跡調査区全体図

の洪積台地との間に集められて，調査区域外へと迂回している（第２図）。

調査の方法は，任意座標による20mピッチの工事用センター杭を基準とし，センターラインに直交するラインによって区割し，設定されたグリッドによって実施した。

確認調査の時点では，グリッド内に２m×６m程度のトレンチを２本づつ，調査対象面積の約10％を目度に入れた。この結果，密度は濃くないものの，全面にわたって遺構および遺物の分布していることがわかり，昭和58年12月より本調査を行なうこととなった。

本調査の結果検出された遺構は，古墳時代の溝状遺構１ヶ所，歴史時代の井戸１ヶ所，土壙５ヶ所，溝状遺構４ヶ所，中・近世以降と考えられる土堰１ヶ所，時期不明の溝状遺構７ヶ所土壙１ヶ所，小ピット33ヶ所の計53遺構であった。また，今回の調査範囲内では，この他に，谷頭部寄りの下層に，古墳時代から律令時代に比定される遺物群を包含する泥炭層の発達が観られた。しかし，1)確認調査の結果から推定された湧水の量を遙かに越え，排水が充分に行なえなかったこと，2)例年を上廻る厳冬のため，遺跡内における湧水の凍結が著しかったこと，3)降雪により，調査が断続的であったこと，4)地下水位の上昇によって遺構内の覆土の含水量が飽和状態に達しており，土層観察用のベルトが崩壊しやすかったこと，5)予想外の泥炭層に充分な対応ができなかったことなどの理由から，調査は必ずしも充分に行なえたとは言えない。以下，遺跡の概要を二，三の項目に分けて述べておきたい。

〔１〕池ノ谷遺跡における遺構の構成について

今回の調査は，前述のとおりの事前調査であったため，池ノ谷遺跡全体の範囲や性格などについては，明らかとすることができなかった。従って，ここでいう「遺構の構成」も，その全体像からみれば極めて微視的であり，単に部分的な傾向を示すものであるいう前提の上で，簡単に整理しておきたい。

今回の調査によって検出された53遺構のうち，時期の不明な小ピット33ヶ所を除けば，約60％にあたる12遺構が構状遺構であった。いづれも水利にかかわるものであり，基本的には谷の奥から先端へと排水する様に緩やかな傾斜がつけられている。しかし，調査区域内を完全に横

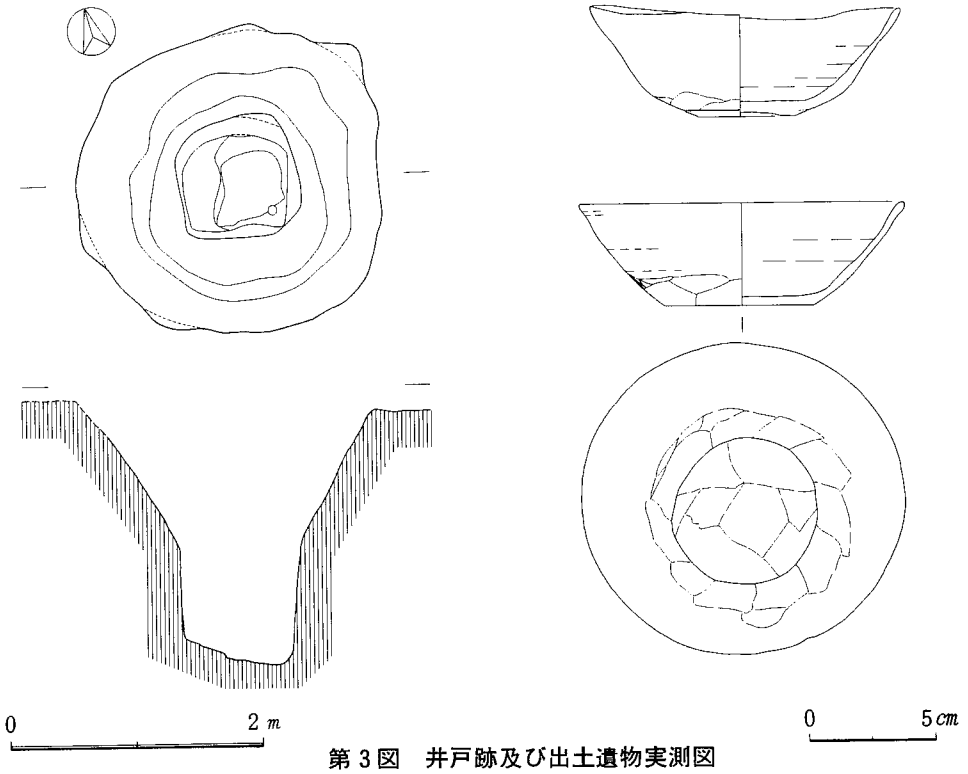
断あるいは縦断する様な溝は，調査区域を斜めに南から北へ縦断する二例以外にはなく，他はすべて調査区域内から開削されている。これに，井戸等の遺構を加えると，80%以上が水利・排水にかかわる遺構であることとなる。これは，調査区域が小谷の先端部に位置することから考えて当然のことと言える。

しかし，井戸の存在などは，安定した上水の需要を意図するものであり，これに先に述べた溝の開削状態や井戸に隣接した場所に検出された長方形の土壙が，用途不明ながらも地下水の湧出を意識的に利用した遺構であると考えられることなどを考慮すると，本遺跡の遺構構成は積極的な土地利用を意図した結果であると理解することができる。

〔2〕井戸について

次に池ノ谷遺跡の代表的な遺構として井戸の紹介をしておきたい。本遺構は，調査区域の西端に位置している。形状は，上方がやや方形がかった椀形を呈し下方は一辺90cm程度の方形であった。遺構確認面からの深さは約2mであり，調査時の現状で観察された地下水による水深は約1mであった。検出された主要遺物は，坏（土師器），鞴の歯口，鉄滓などであり，他に自然遺物として，瓢箪や植物遺体があげられる。杯は，口径13.0cm，底径 6.0cm前後のもので底部のつくりは回転糸切ののち手持ちによってヘラケズリ整形を施したものである。

図示した2点の坏は，井戸のほぼ中層位のところに，上図の坏を下図の坏に伏せた状態で出土しており，本遺構の時期的な下限を示す資料である（第3図）。



第3図　井戸跡及び出土遺物実測図

〔3〕泥炭層内の出土遺物について

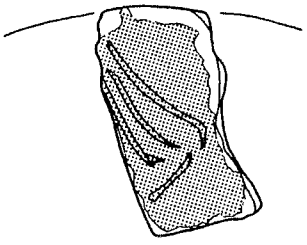
池ノ谷遺跡の立地的な特質のひとつを示すものとして，泥炭層の存在をあげることができる。今回の調査によって確認された泥炭層の範囲は，第4グリッドの一部から東端の小丘下層まで延びており，五領期から国分期までの遺物を包含している。しかし，泥炭層自体の調査については，殆んど実施することができなかった。これは，既に上述したような気候・条件のもとで調査を継続することが非常に困難であったことによるが，それと同時に調査者の視点が遺構の調査に奪われており（当時，井戸の調査を行なっていた），泥炭層に対する充分な理解と配慮に欠けていたところに起因するものであり，今後何等かの方法で調査内容を補足し得るような手段を講じていかなければならないものと考える。

泥炭層内より出土した遺物は，その多くが整理作業中に明らかとなったものである。主要な遺物としては，土師器・須恵器・灰釉陶器・緑釉陶器・古瓦・土錘・石製紡錘車・材・種子などがあげられる。

殊に，灰釉陶器では，皿・坏類が出土しており，不明瞭ながら輪花の手法を有する小片が一点含まれている。また，緑釉陶器には，陰刻花文の施された皿類の口縁片が出土している。

〔4〕陰刻花文について

これは，口縁部上端に花弁を下に向けて描かれた，一重花弁の反花文である（第4図）。小片のため，花弁の数や蕊の形態などについては不明であるが，花弁の輪郭線が連接しておらず，反花も口縁部に密接した形で施文されていないことから，三弁の反花文を数ヶ所に点在して描いたものであると考えられる。



第4図　陰刻花文実測図　1／1

以上、散漫ではあるが、池ノ谷遺跡について概要を紹介した。今回の調査は，微高地の調査という点で多くの問題を孕んでいる。整理作業を通じて，今後に資するものとしたい。

尚，海士有木の調査については，田中清美氏の御教示を得た。記して謝意を表します。

8 福増（ふくます）遺跡

所在地　市原市福増六万部 193－1他

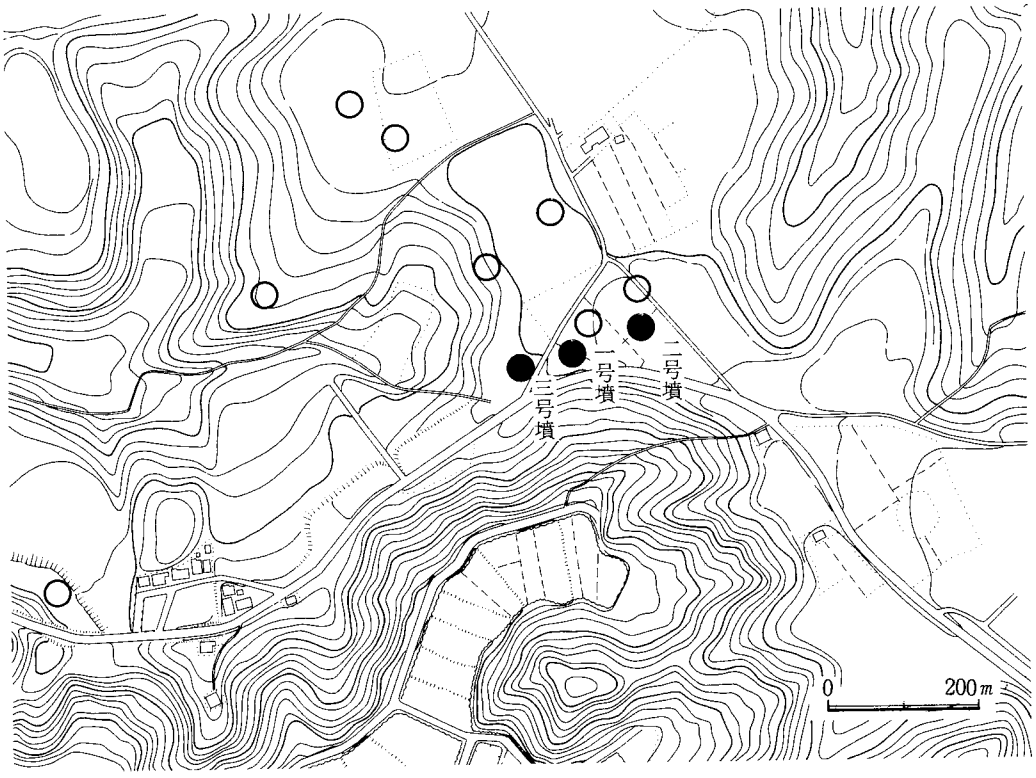
調査期間　昭和58年8月29日～昭和58年9月30日（確認調査）

昭和58年12月1日～昭和59年3月31日（本調査）

調査面積　800㎡

調査概要　房総丘陵を浸蝕・蛇行しながら北上する養老川は，大坪・海士有木の地で，下流のデルタ地帯へと大きく西へ屈曲している。福増遺跡は，この大坪・海士有木の東側，養老側右岸を南北に走行する洪積台地上に位置している。当地では，昭和41年に中村恵次氏等によって福増一号墳および二号墳の調査が実施され，複室構造の横穴式石室を主体部とする円墳2基の存在が明らかとなっている。 (1)今回調査を行なった円墳は，これら一連の福増古墳群中の三号墳にあたっている。（以下，福増三号墳と呼称する。）（第1図）

今回の調査は，市原市福増に新設された福増清掃工場への，搬入道路建設に先行して，工事範囲の終着点である当地に，福増三号墳1基を含む福増遺跡の存在が確認されたために実施したものである。従って，遺跡全体の範囲については未確認であり，福増三号墳についても，工



第1図　福増古墳群と周辺の地形

事範囲外に未掘部分を残しており，主体部は調査範囲内から検出されなかった。しかし，墳丘の規模・形状などについては，或る程度の成果をあげることができ，また他に，溝状遺構１・道路状遺構３・土壙３を検出することができた。しかし，溝状遺構等については，未整理の部分が多いため，本年報では調査の主体となった福増三号墳についてのみ取り挙げて，概要を述べておきたい。

調査の方法は，10cmコンタによる地形測量ののち，墳頂部の推定中心部を基準とする４m間隔のグリッドを設定して行なった。福増三号墳は，同グリッドを活用して墳頂部より八方向に土層観察用のベルトを残して表土を除去し，墳丘測量ののちに盛土を精査して主体部の検出に努めた。当初，福増一号墳および二号墳が，ともに東南に開口する複室構造の横穴式石室を有していることから，同三号墳も同様の形態を有しているものと推測したが，調査区域内には，横穴式石室はもとより，他の構造を有する主体部もまったく検出されなかった。墳丘の規模および形状は，調査の結果，周溝と盛土との間に若干の削り出しを有する，外径26mの円墳であることが判明した。盛土は旧表土面上に盛り，復元推定規模は，基底面径約13m，高さ１mで盛土はローム系土と客土とを使用しているが，構築工程に規格性は認め難く，墳丘の形成に際して盛土上面を固めている様子も看取されなかった。周溝の復元値は，内側上端径22m，下端径23m周溝幅２～ 2.5mを計り，溝深は部分的に段差を有しているため一定していない。周溝開鑿に伴う搬出土量と盛土の度量との比率は現在のところ不明であるが，墳丘裾部を削り出しによって整形していることから考えて，客土の量はさほど多くなかったものと推測される。

福増三号墳に伴なうと考えられる遺物としては須恵器があげられ，西側周溝内より出土した有蓋高坏三セットと壺の口縁片１点であった。いづれも，周溝底よりやや高い位置の周溝内径よりに出土しており，周溝底との間に間層がみられるので，周溝開鑿との間に若干の時間差が考えられる。しかし，福増二号墳において「墓前祭祀における供献具として前庭部に埋置したものと考えられる」破砕須恵器群（復原の結果　平瓶３，壺１と判明）が検出されておりこれに有蓋高坏の供献器具としての性格を考えあわせると，福増三号墳周溝内出土の須恵器についても，当古墳築造の下限を示すものと考えられる。

尚，盛土内より相当量の縄文時代早期および後・晩期の土器片が出土しており，現在整理中ながら，接合可能なものも含まれており，近隣する地域に縄文時代の遺跡が存在しているものと推定される。

(1)　中村恵次他「福増古墳群」市原市文化財調査報告書第三冊『市原市周辺地域の調査』市原市教育委員会（1967）

9 片又木遺跡

所在地　市原市不入斗地先

調査期間　昭和58年4月30日～昭和58年10月4日

調査面積　10,000㎡

調査概要　房総半島の中央部，東京湾に注ぐ養老川の西側に広がる台地は姉ヶ崎地区から，浸食され，崖線となって海岸に沿って伸び，袖ヶ浦町奈良輪地区に於いて，小櫃川に開析されている。この台地は北から境川，立野川，椎津川の三河川により開析され，ほぼ4分割された台地とっなている。本遺跡の位置する台地は境川と立野川に挟まれ，東西に細長く伸びた台地で，小枝谷が複雑に入り込み，尾根と尾根に結ばれたやや開けた平坦地が枝の様に点在する地形を呈している。当遺跡はこの様な平坦地に位置し，台地の標高は約60mで現在の海岸線より直線距離で 3.7km内陸に入る。

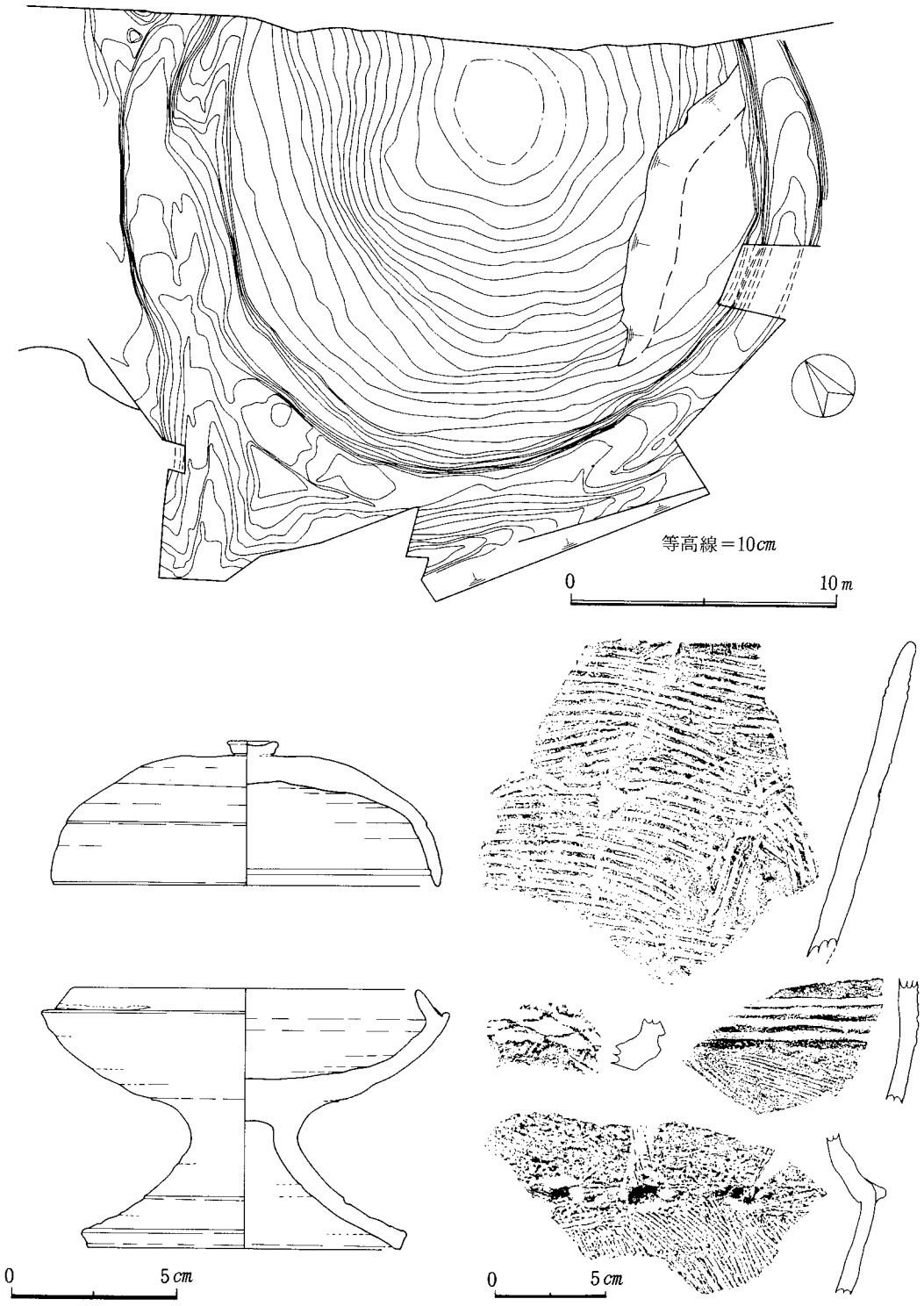
調査区は確認調査の結果，3地点に分かれることになり，A・B・C地区とした。縄文時代の遺物，遺構は3地点に広がっており，B区のみ希薄となるが，本来，連続した遺跡と考えたい。時期は早期後半の子母口式期と思われ，該期の単純遺跡として貴重な資料であった。A区に住居址1軒，炉穴6基，土壙1基がある。B区は，炉穴4基のみで，C区に炉穴が17基，土壙が4基となっている。

古墳時代前期の五領式期に当たる集落が，A・B区に検出され調査区外の山林を挟んで広がっていると考えられる。A区には，住居址が10軒，B区には7軒があり，180×120 mほどの平坦な台地上の北端と東南端を調査したことになる。住居址は貼床を有するものが多く，覆土に焼土が充満していたものもあり，遺物も豊富であるため，五領式期単純集落遺跡の可能性も高いので，保存された個所も含めて，集落研究上重要な遺跡である。A区の住居址からはガラス製の臼玉が出土している。

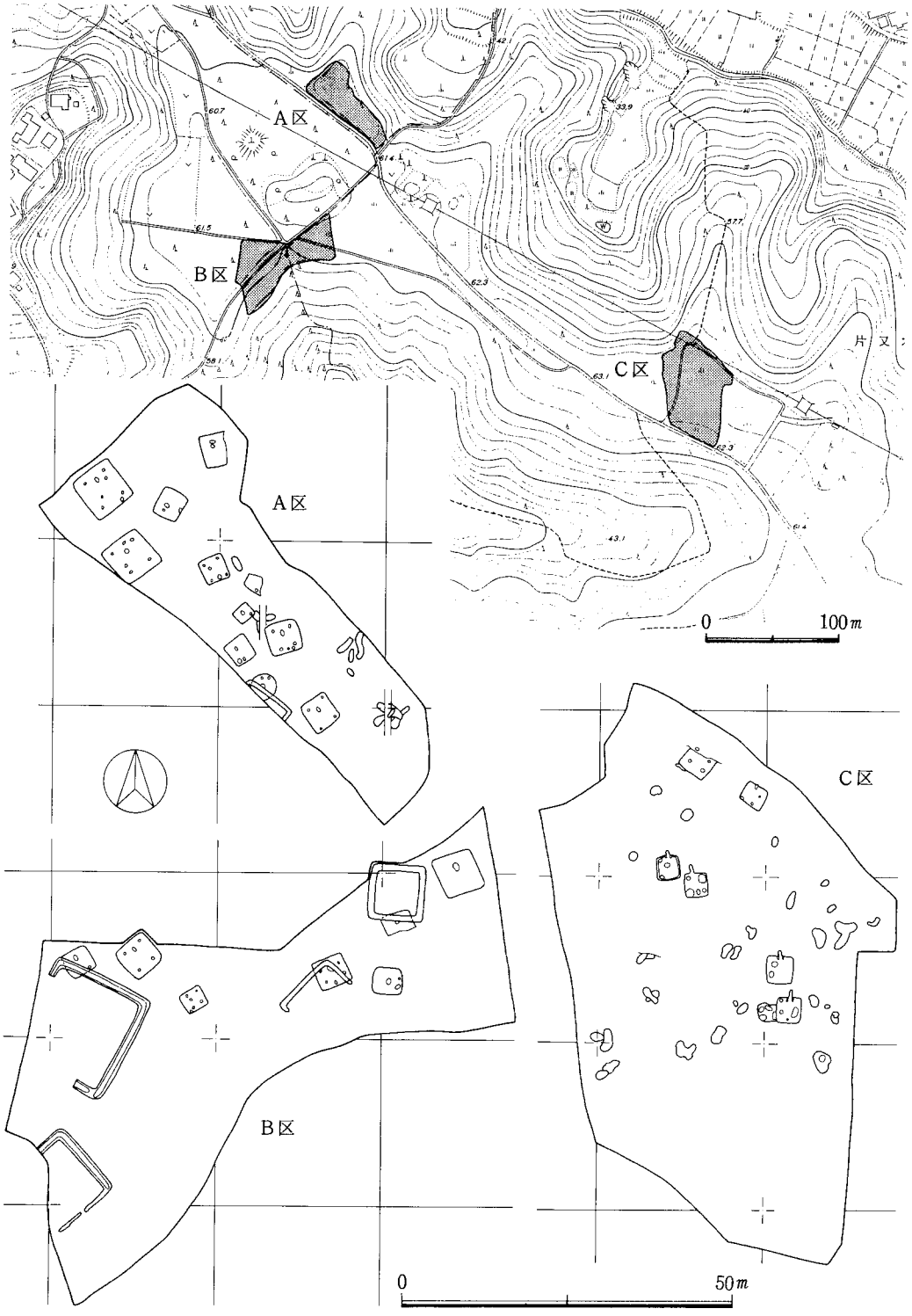
歴史時代には国分式期の集落がC区にのみある。A・B区より東へ 250mほど離れており，幅30～40mの尾根で連結した小台地上にある。住居址が7軒，土壙が5基ある。小規模な集落と考えられるが，出土遺物は内容的に変化に富み，土師器・須恵器の他に，刈り鎌・摘み鎌・刀子・鑷子・紡輪・釘等の鉄製品の他，羽口・鉄滓・石帯などが出土している。

A・B区からは，方形周溝遺構が5基検出されている。C区国分式期の集落の墓址としての関連があるのではないかと考えられている。

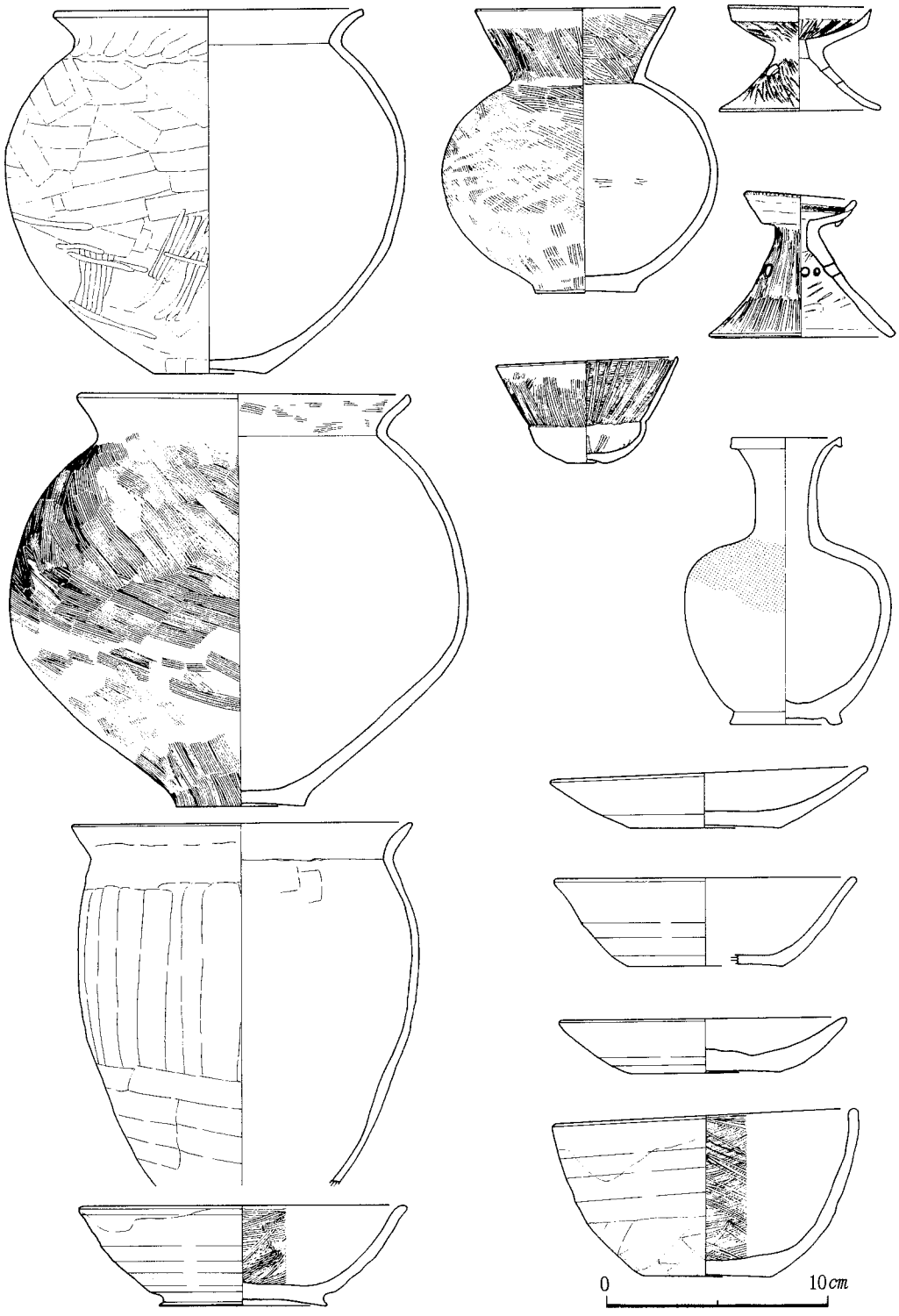
以上の様に，片又木遺跡は縄文時代から歴史時代に分けての複合遺跡であるが，十分な調査・報告が行なわれていない姉ヶ崎地区において貴重な資料の一つとなろう。



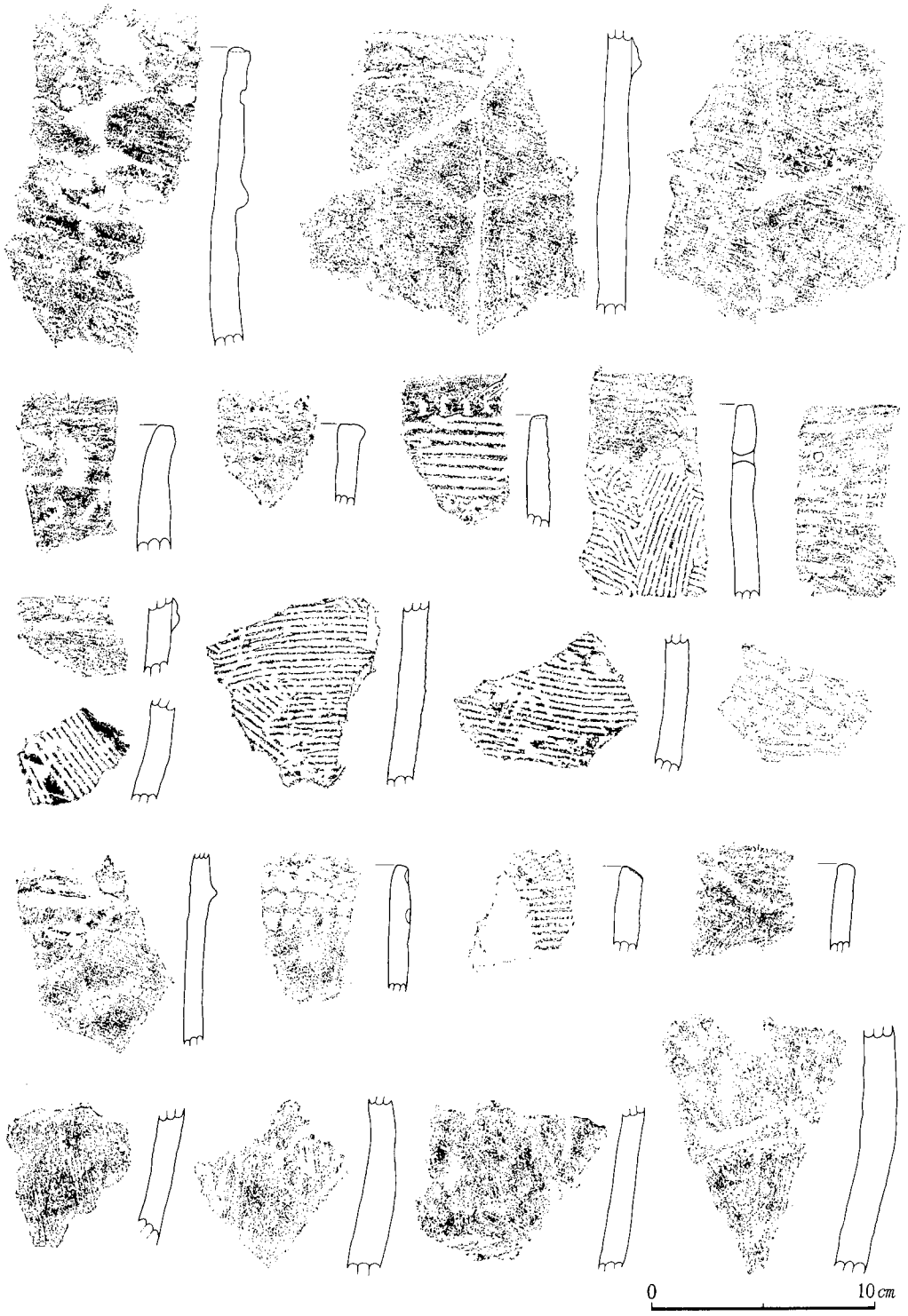
第２図　福増３号墳墳丘測量図及び周溝内出土須恵器と縄文土器拓影図



第１図　片又木遺跡地形図及びＡ～Ｃ区内遺構配置図



第2図　片又木遺跡出土遺物実測図



第3図　片又木遺跡出土縄文土器拓影図

10　石川城郭跡（確認調査）

所在地　市原市石川外輪 881番地　他

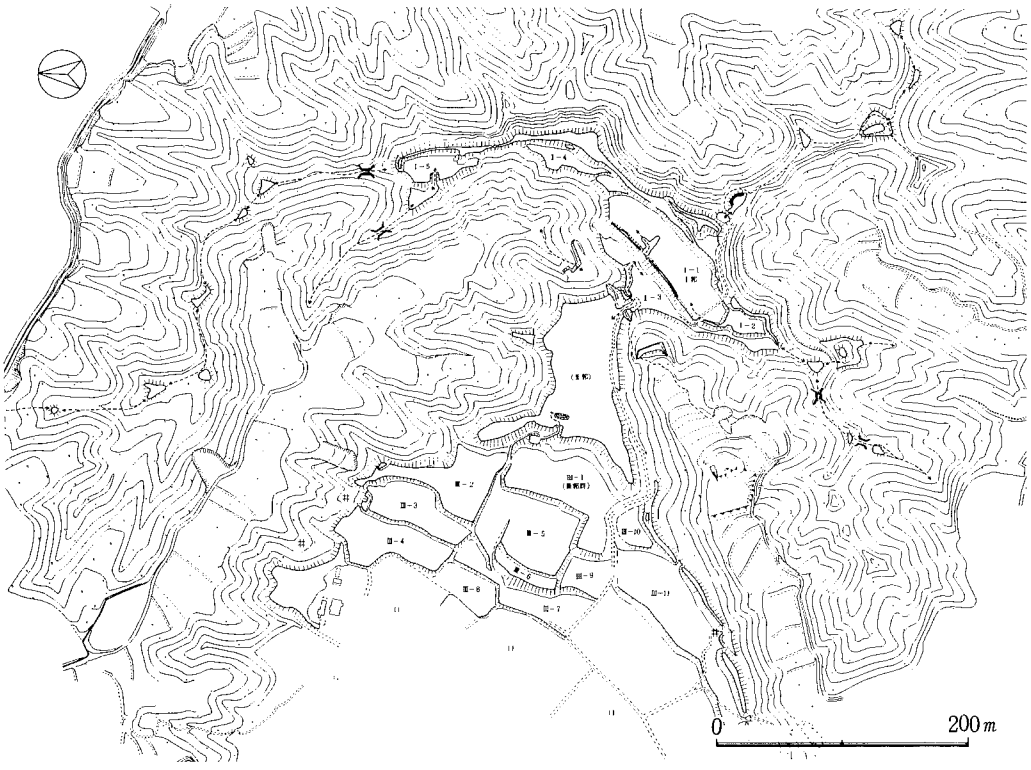
調査期間　昭和58年７月１日～昭和59年３月31日

調査面積　30,000㎡

調査概要　当遺跡は，戦国動乱の時代に構築されたとみられる山城形態を残す城跡である。

遺跡は，昭和48年に千葉県教育庁文化課及び市原市教育委員会文化係の踏査により，城跡と確認された。その後，遺跡所在地がゴルフ場造成に含まれるため，昭和56年，市原市教育委員会の要請により結成された「石川城址縄張り図作成調査会」によって略式測量と踏査の結果，城の全容が明らかとなった。翌，昭和57年には「石川城址調査会」による地形測量が行なわれた。第１図は，これらの資料に基づいて復元された石川城の縄張り図である。

石川城郭跡の規模は，外郭を含め，約40,000㎡を擁する。これは，当遺跡の西方約 4.7kmに位置し，市内屈指の規模をもつ“佐是城”に匹敵するものである。



第１図　石川城縄張図

石川城郭跡の位置は，市原中部の宿駅として栄えた上総牛久から，約 3.5km東方の後背山地に築かれている。北側を養老川支流の内田川に，南側はその支流である石川川に挟まれた高位段丘面と後背山地面の両者にまたがり，東側の標高 110mを測る山地に5つの曲輪からなる第Ⅰ郭，西側の平坦部に第Ⅱ郭，更に以西下位の段丘面には大小11の曲輪によって構成された第Ⅲ郭がある。この内，第Ⅰ・Ⅱ郭は内郭に，第Ⅲ郭は外郭に比定できる。

石川城郭跡の中心的施設をなす第Ⅰ・Ⅱ郭は，綿密に計算された縄張りを施し，逃げ口とみられる東側尾根を除く全ての尾根にはV字状の断ち切りを設けている。土塁は東辺に削り出しを，又，西辺は盛り土によって構成され，曲輪間には桝形土塁と折り歪みのある空堀（第Ⅰ・Ⅱ間），直線状の薔土塁と中段に平場を施した坂路（第Ⅱ・Ⅲ郭間）などの諸施設が遺存する。

第Ⅲ郭は，段階状に削平された曲輪群をなし，以西の平坦台地とは，南北両端を除いて水堀（現・水田）によって遮断されている。加えて北側を“外車輪”，南側を“横宿”の地籍名があり，当初，城郭に伴う集落址と考えられていた。

調査は，造成が予定される第Ⅰ郭と第Ⅲ郭を中心として，トレンチを主とする確認調査を行った。トレンチは2m巾，長さは曲輪の規模に合わせ，20m間隔で設定された。

調査の結果，第Ⅰ郭内では，中心的曲輪とみられる第Ⅰ－1郭から溝状・道路状遺構および小規模の敷石，集石遺構に加えて，火葬址を1基検出したにとどまる。

遺物は，坏形土師質土器を主とし，永楽通宝と少量の陶器片，鉄片，鉄滓，銅が付着した炉壁片など，総数 110点を数えた。これらの内，第Ⅰ－1郭南端に設定された，第12号トレンチ内検出の火葬址からは，同郭内における全検出量の90％を占める坏形土師質土器を検出した。

坏形土師質土器は，器高2cm，口径8cmを測る小型器から，器高3cm，口径10cmを測る大型器と両者の中間値を測る3類に分かれる。又，少例ではあるが，底部にスノコ状の圧痕が残るもの，穿孔のあるものなども含まれており，市内外における出土例との形態比較によって，16世紀後半に比定できる。第2図はその一例である。

第Ⅱ郭は，第Ⅰ郭及び第Ⅲ郭との間の虎口状遺構及び一条の土塁を除いて，地上施設は認められていない。この第Ⅱ郭のみ保存地区に指定されている。

第Ⅲ郭内では，溝状遺構の他，複数のピットが確認されたが，確認調査の段階であり，機能及び性格については不明と言わざるをえない。

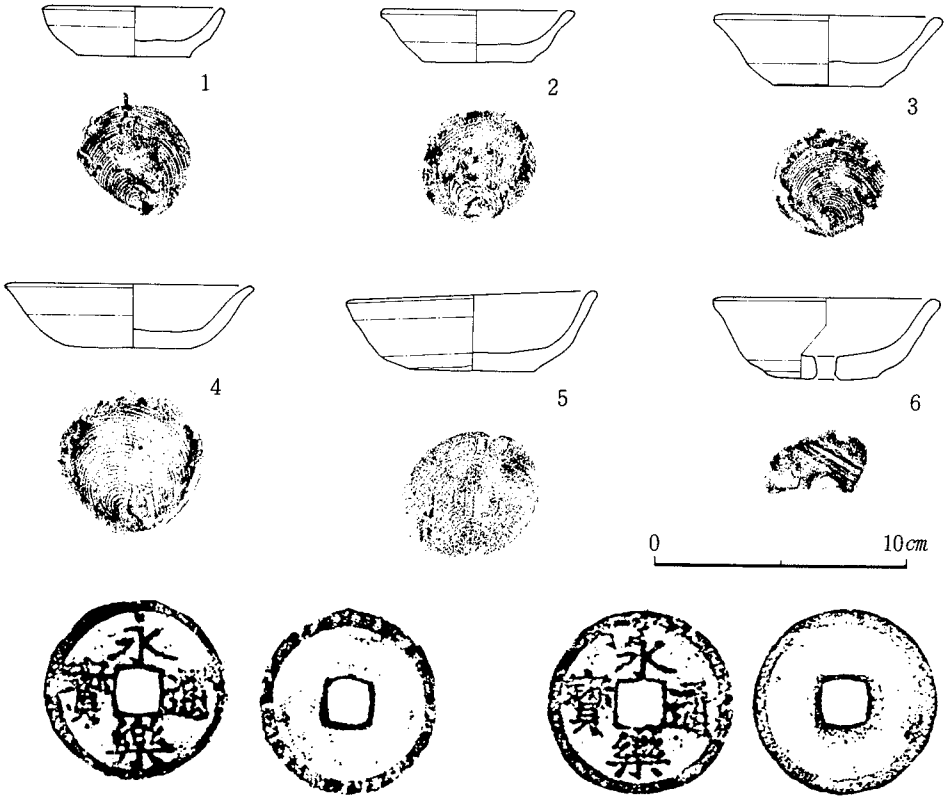
遺物は，土製内耳ナベの他，瀬戸・美濃・有田などを中心とする。坏形・鉢形・甕形などの近世陶器及び寛永通宝・天保通宝を主とする古銭10点など，総数 189点を検出した。第3図はその一例である。

第Ⅲ郭内検出の遺物については，時期的なものに加え，幾つかの伝承により，明治初期，遠州浜松から上総市原に移封された浜松六万石井上氏に関係するものとみられる。

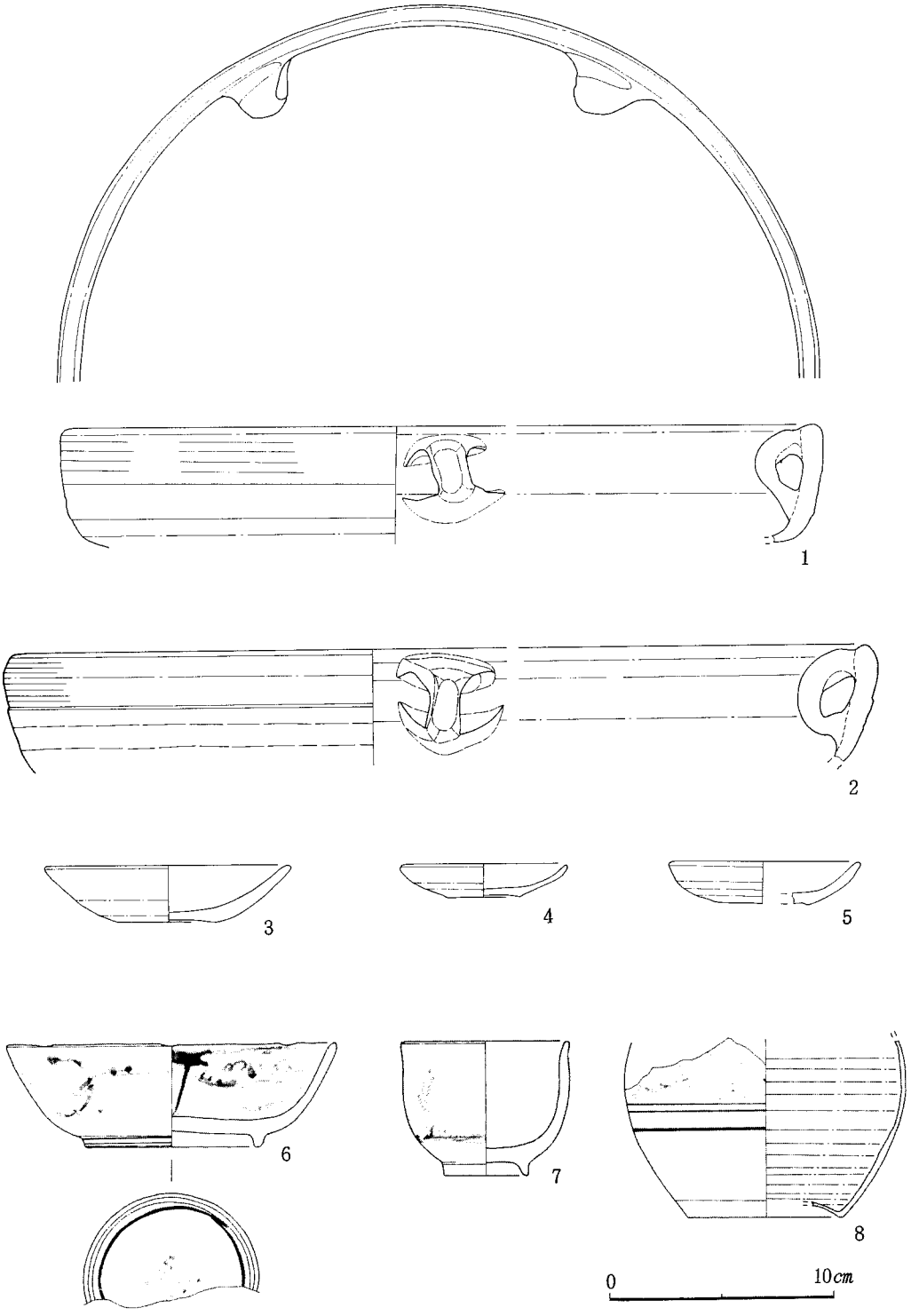
石川城郭跡が位置する石川とは，旧佐是郡内田郷を指す。佐是郡とは養老川の流域に沿った市原中・南部の一帯を示し，南の高滝から現在の佐是地区までを言う。又，内田郷とは，同郡の北東部に位置し，原田，島田，石川などの数ヶ村を含めた一帯を指す。

内田郷は，15世紀後半から16世紀前半にかけて，上総一帯を支配した房総武田氏の二大拠点である真理谷（木更津市真里谷）と長南（長生郡長南）を結ぶ交通路の中間に位置し，長南の北方にあたる長北（長生郡長柄）との国境までは，約 1.5kmと近い。後に里見氏による上総支配の根拠地となった久留里（君津市久留里）とも結ばれており，南側に接する池和田郷と共に外洋（太平洋側）から上総北西部（市原西部）及び上総南西部（千葉市南部）などの内湾側（東京湾）に通じる中継地でもある。そのためか，内田・池和田両郷には石川城を始めとして多くの城砦が密集状態で築かれており，位置的にその重要性をうかがわせている。

今回の調査は，確認という限定された方法で行なわれ，その中から得られた数少ない物質的資料が調査の目的に必ずしも見合うものとは言えない。特に，第III郭の調査では，城に伴うと思われる集落の存在が想定されたが，発掘範囲内での検出物からそれを裏付ける成果はえられなかった。



第２図　第Ⅰ郭12－１号遺構出土遺物実測図及び拓影図



第3図　第Ⅲ郭内出土遺物実測図

11 堰の上遺跡

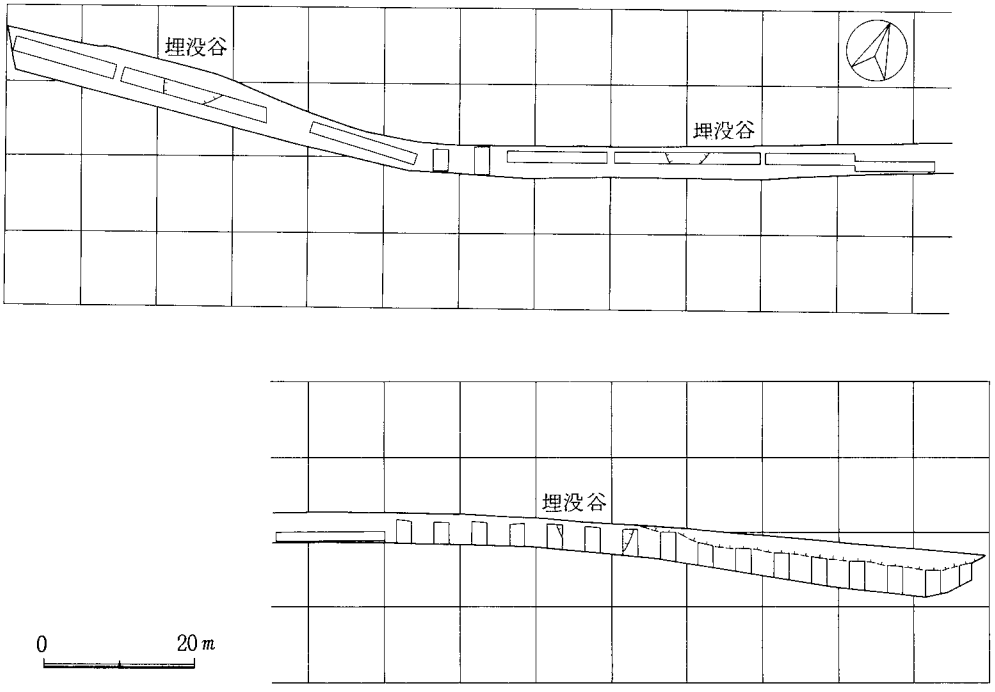
所在地　市原市久保字神土30－1他

調査期間　昭和58年12月2日～昭和58年12月28日

調査面積　2,500 ㎡の10％

調査概要　堰の上遺跡は養老川中流域東岸に位置する。付近は洪積世及び洪積世。段丘面が複雑に展開しており，本遺跡も洪積世下位段丘面に占地している。調査範囲は幅3～5m，長さ 220mの北東～南西方向に伸びる帯状を呈しており，2つの小台地をまたいでいる。調査範囲の北東側の大部分は，南西から北東に向かって伸びる丘状小台地の北西斜面部にあたり，出土遺物は極めて少ない。本来の堰の上遺跡はこの台地を示している。これに対し，調査範囲の西端部は北側に連なる台地上に位置する久保堰の台遺跡の南端部にあたり，土器片が比較的多く出土している。調査範囲内からは，遺構は全く確認されず，縄文時代後期の土器・石器が包含層中から出土しただけであった。尚，堰の台遺跡からは，かつて土偶が発見されている。

註1　穴倉昭一郎「養老川中流域発見の土偶」『南総郷土文化研究会誌　第六号』　1968



堰の上遺跡トレンチ配置図

12 皿郷田茂遺跡

所在地　市原市平野69

調査期間　昭和58年10月14日～昭和58年11月18日

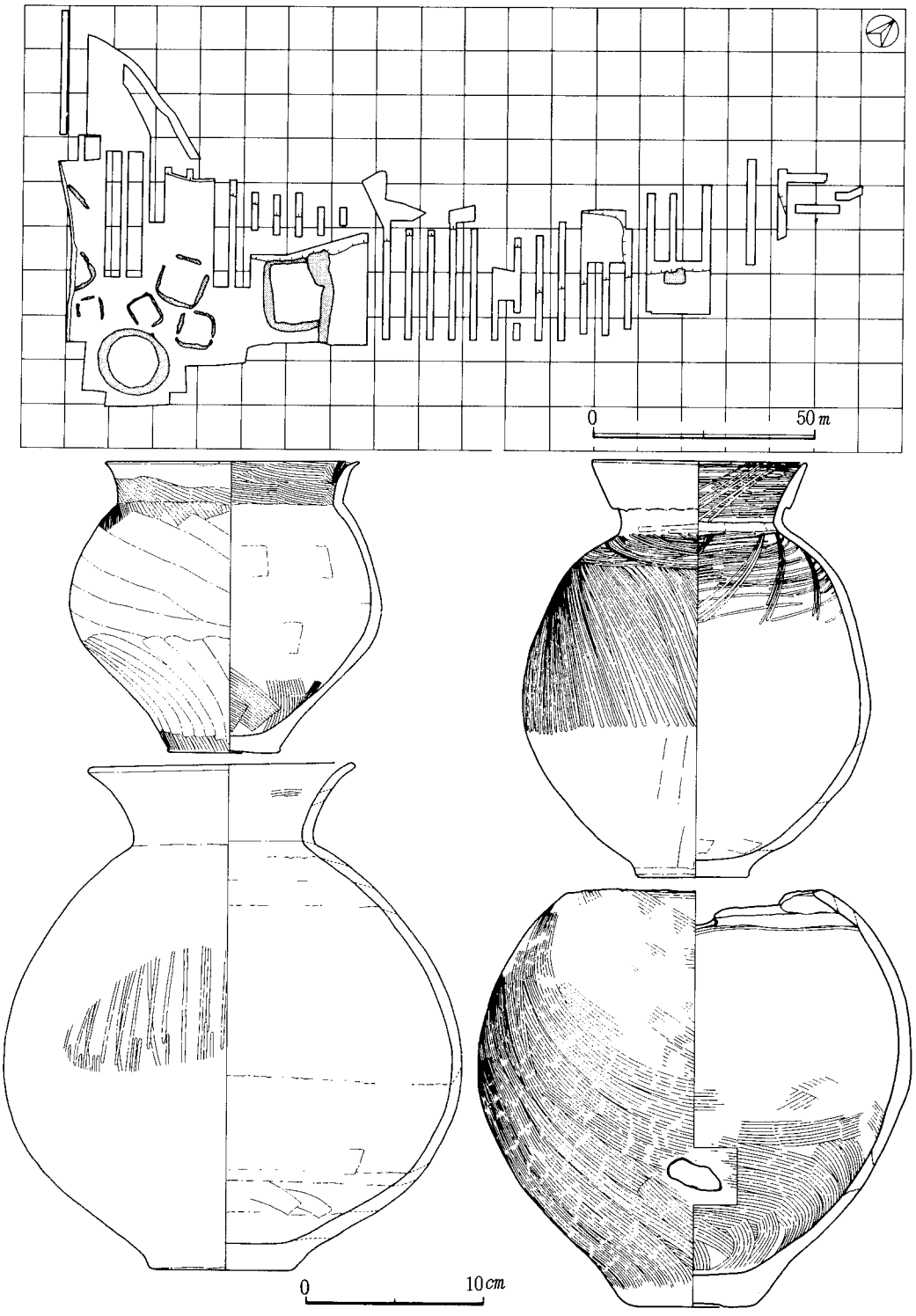
調査面積　6,100 ㎡

調査概要　皿郷田茂遺跡は養老川中流域西岸の洪積世河岸段丘面に位置する。養老川における洪積世台地（下総台地）・段丘面，沖積面を見ると，下流域では台地・段丘面ともに平坦面が広く連続し，沖積面も幅広で川の蛇行が緩いために低地平坦面が広く続いている。これに対し中流域の平蔵川との分岐点より上流になると，洪積世台地はなくなり河岸段丘面も小規模化しており，洪積世面においては広域な平坦面の確保は困難になってくる。また沖積地は幅狭になり，さらに養老川の著しい蛇行によって分断されてしまっており，河床との比高差が大きいため台地的形態を呈している。

皿郷田茂遺跡の立地を見ると，東と西を丘陵状の洪積世段丘に挟まれた沖積世河岸段丘面に占地する。丘陵と沖積面との比高差は約 100m，沖積地の幅は約 600mである。遺跡の立地する洪積世段丘面は，南東・北東側を養老川本流に，北西側を支流である万田野川によって大きく開析され，前者とは19m，後者とは15mの比高差があって上流部における沖積世台地状を呈しており，この地区をおける遺跡立地の在り方を良く示している。

検出された遺構は古墳時代前半の竪穴住居址と墳墓，それに近世の溝である。竪穴住居址は調査区北西端の台地先端部で１軒のみ検出された。約½が水田の造成時に破壊されてしまっており，出土遺物は土器片と管玉１個のみであった。未調査の南東側に集落が展開するものと思われる。墳墓は方形周溝墓７基，円形周溝墓１基，甕棺墓１基である。方形周溝墓は大型のものが一辺約16.5m程であるが，小型のものは約６ｍで大きさは不均一である。また四辺に溝が廻らず，「コ」字形を呈するものも数基ある。円形周溝墓は楕円形に近く，周溝外側で長径16.85m，短径14.5mを測る。甕棺墓は円形周溝墓の溝の外壁を掘り込んで埋められていた。甕の底部破片を下にして，口縁部を欠いた他の甕が伏せられていた。これらの墳墓群は大きく３群に分かれており，未調査の西方側に展開していくもと思われる。

今回の調査では，周辺地区において横穴墓が営まれる前段階の墓制のあり方や，地域勢力の規模がある程度推察できる資料が得られた。調査された周溝墓は溝だけであり，古墳と見ることもできるが，「コ」字形を呈するものがあり，やはり周溝墓として理解できる。伴出した土器には和泉期のものもあり，養老川上流域に比べての後進性が見られる。いずれにしても，こうした墳墓群が存在し得た基盤としての生産が，どの様なものなのか今後の問題となろう。



皿郷田茂遺跡　遺構関連図及び出土土器実測図

13 見立林遺跡

所在地　市原市姉崎字見立林3424－1地先他

調査期間　昭和57年 7月20日～昭和57年 8月10日

調査面積　約 450m²の約10％

調査概要　見立林遺跡の所在する姉崎地区は，市原市の北西部に位置し，東京湾を西に望み養老川の沖積地が北側に開けている。見立林遺跡は，北側に延びる樹枝状を呈する丘陵上でその突端部より奥に約 1.5km入った標高約50mの平坦面に立地する。また，南側には，片又木川の小谷を望むことができる。遺跡全体の面積は，約10,000m²で，現状は，畑地と山林である。畑地の表面には，縄文式土器と土師器が散布する。

今回調査した区域は，遺跡の北側，樹枝状に東より入り込む谷を望む，やや北に傾斜する部分である。調査は，傾斜に添う幅1mのトレンチを1本（長さ11m），傾斜に直行する幅1mのトレンチ3本（長さ13m，15m，21m）を設定した。表土からソフトローム層までの深さは約 0.5～0.7 mを測る。遺構は全く確認されず，縄文式土器が数点出土しただけである。

14 唾王山遺跡

所在地　市原市姉崎字唾王山3417番地

調査期間　昭和57年 8月11日～ 8月20日

調査面積　約 120m²の約10％

調査概要　唾王山遺跡は，上記の見立林遺跡と同じ丘陵上に所在するが，見立林遺跡からは小谷を挟んで約 200m北側の平坦面に位置し，標高は，約40mである。遺跡全体の面積は，約25,000m²であるが，西側の一部は，青葉台団地の造成により削平されている。現状は山林で，前方後円墳1基，円墳3基が認められ，下層部には，縄文式土器・土師器散布地が存在する。

今回の調査は，遺跡の南側斜面で，幅1mのトレンチ（長さ13m）を傾斜に直行して設定した。表土からソフトローム層までの深さは，約 0.2～ 0.3mを測る。遺構・遺物は，全く検出されなかった。

昭和57・58年度　受贈図書一覧

書　　名	寄　贈　者	受　入　日
東京都埋蔵文化財センター年報	(財)東京都埋蔵文化財センター	57. 6. 23
茨城県文化財センター年報	茨城県文化財センター	57. 6. 24
竜ケ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書7（上）	同	〃
大生郷工業団地内埋蔵文化財調査報告書	同	〃
竜ケ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書7（下）	同	〃
同　　成沢遺跡屋代A遺跡6	同	〃
石岡都市計画事業南台土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書	同	〃
常盤自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書4	同	〃
稗田川遺跡	(財)北九州市教育文化事業団	57. 7.
新道寺．天疫神社前遺跡	同	〃
本城中学校北遺跡	同	〃
黒ケ畑遺跡	同	〃
荒神森古墳	同	〃
日蜂山遺跡	同	〃
茶屋原西遺跡	同	〃
辻田西遺跡	同	〃
埼玉県年報(2)	(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団	57.
滋賀県文化財目録	(財)滋賀県文化財保護協会	57. 9. 20
近江の文化財教室	同	〃
滋賀文化財だより	同	〃
遺跡確認法の調査研究　昭和55年度実施報告	文　化　庁	57. 10. 2
広域遺跡保存対策調査研究報告	同	〃
千葉県中近世城跡研究調査報告書．本納城跡，森山城跡発掘調査報告書	(財)千葉県文化財センター	57. 10. 5
成東町真行寺廃寺跡確認調査報告書	同	〃
日秀遺跡遺構確認調査報告概要	同	〃
千葉市矢作貝塚	同	〃
常盤自動車道埋蔵文化財調査報告書Ⅰ	同	〃
千葉東南部ニュータウン11 六通金山遺跡	同	〃
茂原市山崎横穴群	同	〃
千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書Ⅶ	同	〃
市原市養老藤原式揚水車．1.2号機	同	〃
市原市番後台遺跡．神明台遺跡	同	〃
千葉県文化財センター年報No.6	同	〃
多摩ニュータウン遺跡　Ⅰ	(財)東京都埋蔵文化財センター	57. 10. 5
同　　Ⅱ	同	〃
同　　Ⅲ	同	〃
同　　Ⅵ	同	〃
公津原　Ⅱ　本文	市原市教育委員会	〃
同　　挿図	同	〃
同　　図版	同	〃
木の根	同	〃
市原市土宇遺跡発掘調査報告	同	〃
市原市大厩遺跡	同	〃
同　　図版	同	〃

書　　名	寄　贈　者	受　入　日
千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書　本文　Ⅰ	市原市教育委員会	57. 10. 5
同　図版(1) Ⅰ	同	〃
同　図版(2) Ⅰ	同	〃
同　本文　Ⅱ	同	〃
同　図版　Ⅱ	同	〃
同　Ⅲ	同	〃
同　Ⅵ	同	〃
同　Ⅴ	同	〃
西広貝塚（上総国分寺台遺跡調査報告Ⅲ）	同	〃
千葉県萩ノ原遺跡　本文	同	〃
同　図版	同	〃
市原市菊間遺跡	同	〃
南向原（上総国分寺台調査報告Ⅱ）	同	〃
東間部多古墳群（上総国分寺調査報告Ⅰ）	同	〃
上総山王山古墳	同	〃
千葉南総中学遺跡	同	〃
佐倉市江原台遺跡発掘調査報告書Ⅰ	同	〃
諏訪台古墳群調査概要	同	〃
市原市藪遺跡	同	〃
鳥　越　塚	同	〃
上総国分寺台発掘調査概要Ⅵ　祇園原貝塚	同	〃
今富地区遺跡発掘調査報告書	同	〃
岩横穴群発掘調査報告書	同	〃
豊成作ノ丈遺跡	同	〃
上総国分寺台調査概報	同	〃
山武猪ノ提遺跡	同	〃
椎津城の歴史	同	〃
市原市台遺跡Ｂ地点の実態調査報告	同	〃
八日市場文化財調査報告書（米倉，神崎古墳調査報告）	同	〃
研究紀要３　考古学からみた房総文化	同	〃
増善寺遺跡	(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団	57. 10. 19
毛呂山団地関係伴六	同	〃
一般国道140号（寄居町．花園村工区．上南原）Ⅱ	同	〃
一般国道17号線深谷バイパス道路関係新ケ谷戸Ⅰ	同	〃
一般国道140号（寄居町．花園村工区．下南原）Ⅰ	同	〃
日本住宅公団高坂丘陵地区桜山窯跡群	同	〃
堺窪遺跡Ⅱ	同	〃
関東自動車道路（沼下，平原新堀，中山，お金塚，中井丘，鶴巻，水	同	〃
久保，狢久保遺跡）	同	〃
関東自動車道路後張XⅢ　図版編Ⅰ	同	〃
同　本文編Ⅰ	同	〃
県立浦和商業高等学校関係Ⅱ　白幡本宿	同	〃
関東自動車道路関係XⅡ　中郷	同	〃
県営都幾川明覚団地関係　衆生ケ谷戸	同	〃
紀　要　Ⅱ	(財)岩手県埋蔵文化財センター	57. 10. 21
御所ダム建設関連遺跡発掘調査報告書（桜松 除Ⅰ．除Ⅱ遺跡．下猿田	同	〃
Ⅰ遺跡）	同	〃

書　　名	寄　贈　者	受　入　日
御所ダム建設関連遺跡発掘調査報告書（繋V. 新城館遺跡，野中遺跡）	(財)岩手県埋蔵文化財センター	57. 10. 21
御所ダム建設関連遺跡発掘調査報告書（雫石町，下長谷地，元御所I. II遺跡）	同	〃
寒風遺跡発掘調査報告書	同	〃
岩手県松尾村．野駄遺跡第2次発掘調査報告書	同	〃
田代遺跡発掘調査報告書	同	〃
上の山館遺跡発掘調査報告書	同	〃
扇畑II遺跡発掘調査報告書	同	〃
有矢野遺跡．上の山X遺跡発掘調査報告書	同	〃
宮野目十三塚発掘調査報告書	同	〃
二戸バイパス関連遺跡発掘調査報告書　家の上遺跡　長瀬A遺跡	同	〃
同　　長瀬B遺跡	同	〃
岩手県埋蔵文化財発掘調査略報　56年度分	同	〃
金ケ崎バイパス関連遺跡発掘調査報告書　III	同	〃
同　　水沢市膳性遺跡1分冊	同	〃
同　　2分冊	同	〃
御所ダム建設関連遺跡発掘調査報告書 盛岡市萪内遺跡（I）本文表．図版	同	〃
御所ダム建設関連遺跡発掘調査報告書 盛岡市萪内遺跡（II）図版	同	〃
御所ダム建設関連遺跡発掘調査報告書 盛岡市萪内遺跡（III）写真図版	同	〃
千葉東南部ニュータウン十小金沢貝塚	(財)千葉県文化財センター	57. 11. 2
成田市三里塚馬場遺跡	同	〃
長原遺跡発掘調査報告II　本文（大阪市平野区）	大阪市文化財協会	57. 11. 9
同　　図版（　〃　）	同	〃
瓜破北遺跡　大阪市下水道管渠築造工事（瓜破地区その8，その9）に伴う発掘調査報告書	同	〃
寿能泥炭層遺跡発掘調査報告書　－自然遺物編－	埼玉県教育委員会	57. 11. 16
同　　付　図	同	〃
邪馬台国の謎を解く	(財)大阪文化財センター	57. 11. 19
巨摩．瓜生堂（近畿自動車道　天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書）	同	〃
巨摩．瓜生堂　（同） 図版	同	〃
清里陣場遺跡	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団	57. 11. 27
長瀬高浜遺跡発掘調査報告書 IV	(財)鳥取県教育文化財団	57. 11. 29
天神川流域下水道事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書		
千葉県文化財センター　研究紀要7	(財)千葉県文化財センター	57. 12. 4
松戸市金楠台遺跡　国鉄小金線建設に伴う埋蔵文化財調査報告書	同	57. 12. 21
千葉市上ノ台遺跡　国鉄幕張電車基地建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書	同	〃
柏市鳴の巣遺跡　付図	同	〃
袖ケ浦町　山野貝塚　飯富山野貝塚出土表付	同	〃
千葉東南部ニュータウン　I	同	〃
同　　II	同	〃
同　　III	同	〃

書　　名	寄　贈　者	受　入　日
千葉東南部ニュータウン　Ⅲ　図版編	(財)千葉県文化財センター	57. 12. 21
阿玉台北遺跡	同	〃
飯山満東遺跡	同	〃
大原神社遺跡	山武考古学研究所	57. 12. 27
外和戸遺跡	同	〃
エゴダ遺跡	同	〃
大阪文化誌	(財)大阪文化財センター	58. 1. 17
市原市史（下巻）	市原市教育委員会	58. 1. 25
年　報　－1－	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団	〃
内宿遺跡　－古代集落の調査－	福島県いわき市教育委員会	〃
竹之内遺跡　－縄文時代早期の調査－	同	〃
千葉県地名変遷総覧	千葉県立中央図書館	58. 2. 10
千葉県郷土資料総合目録　－索引編－	同	〃
千葉県郷土資料総合目録	同	〃
千葉県郷名分布図	同	〃
京都府埋蔵文化財情報（創刊号）	(財)京都府埋蔵文化財調査センター	58. 3. 5
同　（第2号）	同	〃
同　（第3号）	同	〃
同　（第4号）	同	〃
同　（第5号）	同	〃
本郷向	千葉市遺跡調査会	58. 3. 15
定原遺跡	同	〃
長岡京市文化財調査報告書	長岡京市教育委員会	58. 3. 19
京都府長岡京市下海印寺遺跡範囲確認調査報告書	同	〃
長岡京市埋蔵文化財センター設立紀念講演会	同	〃
ひろしまの遺跡	(財)広島県埋蔵文化財センター	58. 3. 22
円護寺遺跡群	(財)鳥取県教育文化財団	58. 4. 16
長瀬高浜遺跡発掘調査報告書　Ⅴ（本文編）	同	58. 4. 25
同　（図録編）	同	〃
壬遺跡1983　新潟県中魚沼郡中里村	国学院大学文学部考古学研究室	58. 4. 27
物見処遺跡1983　東京都三宅村伊豆	同	〃
京都市域における埋蔵文化財の発掘・試掘・立会調査一覧　1981	(財)京都市埋蔵文化財研究所	58. 5. 4
平安京左京八条三坊　1982	同	〃
九坊院遺跡　1983	相模原市九坊院遺跡調査団	〃
東京都町田市東玉川学園遺跡調査報告書　1983	町田市東玉川学園遺跡調査団	〃
東玉川学園遺跡	同	〃
清水川台遺跡発掘調査報告書	(財)君津郡市文化財センター	58. 5. 12
多摩ニュータウン遺跡（第5分冊）	(財)東京都埋蔵文化財センター	58. 5. 20
同　（第6分冊）	同	〃
同　No.513　遺跡Ⅰ	同	〃
辰巳ケ原遺跡	市原市辰巳ケ原遺跡調査会	58. 5. 30
向原遺跡（第1分冊）	神奈川県教育委員会	58. 6. 2
同　（第2分冊）	同	〃
同　（第3分冊）	同	〃
同　（第4分冊）	同	〃
同　（第5分冊）	同	〃
同　（第6分冊）	同	〃

書　　名	寄　贈　者	受　入　日
向原遺跡　附図　13枚	神奈川県教育委員会	58. 6. 2
祇園原貝塚 Ⅲ	上総国分寺台発掘調査団	〃
神奈川県立埋蔵文化財センター 年報 Ⅰ	神奈川県立埋蔵文化財センター	〃
早川天神森遺跡	同	〃
千葉東南部ニュータウン13　上赤塚1号墳・狐塚古墳群	(財)千葉県文化財センター	58. 6. 3
市原市番後台竹部田遺跡　高滝取水場建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書	同	〃
新東京国際空港　埋蔵文化財発掘調査報告書 Ⅲ　No. 14遺跡	同	〃
千葉市双子塚　横戸団地建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書	同	〃
成田新線建設事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書 Ⅱ　(関戸遺跡)	同	〃
〃　Ⅲ　(堀之内遺跡)	同	〃
芝山町山田古墳群・山田出口遺跡	同	〃
年報No. 1	(財)君津郡市文化財センター	58. 6. 7
研究紀要 Ⅰ	同	〃
塚原遺跡発掘調査報告書	同	〃
亀井遺跡	(財)大阪文化財センター	〃
千葉県山武町森台古墳群の調査	青山学院大学森台遺跡発掘調査団	〃
青柳向台遺跡発掘調査報告書	(財)君津郡市文化財センター	58. 6. 13
京都府埋蔵文化財情報　第6号	(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター	58. 6. 14
大福山の自然林　附市原市植物仮目録	市原市教育委員会	58. 6. 17
坊作遺跡発掘調査概要	同	〃
千草山遺跡	同	〃
御所ダム建設関連遺関発掘調査報告書　雫石町 塩ケ森Ⅰ・Ⅱ遺跡 (本文・写真図版)	(財)岩手県埋蔵文化財センター	58. 6. 18
同　(図版)	同	〃
岩手県埋蔵文化財発掘調査略報 (57年度分)	同	〃
紀　要 Ⅲ	同	〃
考古遺物資料集　第3集　岩手県種市町，野田村，大野村，山形村，普代村，田野畑村	同	〃
一粒の籾　講演会特集号	学習院大学考古学研究会	58. 6. 27
下吉田古墳群	(財)北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室	58. 7. 13
菅生遺跡	同	〃
長行遺跡	同	〃
白萩遺跡，潤崎遺跡，瀬板遺跡，西ソノ遺跡，一升水遺跡	同	〃
佐倉市立山遺跡　鶴牧古墳群・人形塚	(財)千葉県文化財センター	58. 7. 13
千原台ニュータウン Ⅱ 草刈遺跡A区 (第1次調査)	同	〃
千葉東南部ニュータウン12	同	〃
松戸市五香六実元山所在馬土手	同	〃
主要地方道成田松尾線 Ⅰ	同	〃
千葉市大道遺跡・生実城跡発掘調査報告書	同	〃
研究連絡誌　第1号	同	〃
同　第2号	同	〃
同　第3号	同	〃
同　第4号	同	〃
成東町真行寺廃寺跡研究調査概報	同	〃
千葉県文化財センター年報　No. 7	同	〃

書　　名	寄　贈　者	受　入　日
大堀城跡発掘調査報告書	(財)大阪文化財センター	58. 7. 7
千葉県埋蔵文化財発掘調査抄報（昭和56年度）	千葉県教育庁文化課	58. 7. 18
千葉県中近世城跡研究調査報告書　第3集	千葉県教育委員会	〃
下総町名木廃寺跡確認調査報告	同	〃
長岡京市文化財調査報告書　第11冊	長岡京市教育委員会	58. 7. 21
長岡京市埋蔵文化財センター年報　昭和57年度	(財)長岡京市埋蔵文化財センター	〃
赤城跡発掘調査概報	(財)広島県埋蔵文化財調査センター	58. 7. 29
西ケ迫古墳群	同	〃
天高第1号古墳	同	〃
薄古第1号・第2号古墳発掘調査報告	同	〃
滑谷遺跡	同	〃
境ケ谷遺跡群	同	〃
奥田大池遺跡	同	〃
古江西第1号貝塚発掘調査報告	同	〃
溝下遺跡発掘調査報告書	同	〃
榎ケ峠第2号古墳発掘調査報告	同	〃
鳥ケ尾第1号古墳発掘調査報告	同	〃
西条第一土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（Ⅰ）	同	〃
沖田古墓	同	〃
山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（Ⅰ）	同	〃
備後国府跡	広島県教育委員会	〃
広島県文化財調査報告　第14集	同	〃
亀山遺跡　第2次発掘調査概報	同	〃
下本谷遺跡第4次発掘調査概報	同	〃
酒屋高塚古墳	同	〃
緑岩古墳	同	〃
中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（4）	同	〃
四街道市の文化財　市指定文化財特集号9号	四街道市教育委員会	〃
長法寺南原古墳	大阪大学文学部国史研究室	58. 7. 19
京都府遺跡調査概報　第1冊	(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター	58. 7. 30
同　第2冊	同	〃
同　第3冊	同	〃
同　第4冊	同	〃
龍門寺遺跡の概要	(財)いわき市教育文化事業団	58. 8. 1
唐崎台　略報		58. 8. 1
志波城跡発掘調査報告書　第45集	(財)岩手県埋蔵文化財センター	58. 8. 2
叺屋敷Ⅱ遺跡発掘調査報告書　第47集	同	〃
叺屋敷Ⅲ遺跡発掘調査報告書　第48集	同	〃
滝谷Ⅲ遺跡発掘調査報告書　第49集	同	〃
沼山遺跡嶽Ⅰ遺跡・土弓Ⅰ遺跡	同	〃
発掘調査報告書　第50集		
長瀬C遺跡第2次発掘調査報告書　第51集	同	〃
小堀内Ⅰ遺跡発掘調査報告書　第52集	同	〃
伊保内Ⅰa・Ⅰb遺跡発掘調査報告書　第53集	同	〃
名高根遺跡発掘調査報告書　第54集	同	〃
上里遺跡発掘調査報告書　第55集	同	〃
上村遺跡，下村A遺跡，下村B遺跡発掘調査報告書　第56集	同	〃

書　　名	寄　贈　者	受　入　日
荒谷A遺跡発掘調査報告書　第57集	(財)岩手県埋蔵文化財センター	58. 8. 2
赤坂田Ⅰ・Ⅱ遺跡発掘調査報告書　第58集	同	〃
江刺家Ⅳ・Ⅴ遺跡発掘調査報告書　第59集	同	〃
上の山Ⅶ遺跡発掘調査報告書　第60集	同	〃
叺屋敷Ⅰa遺跡発掘調査報告書　第61集	同	〃
君成田Ⅳ遺跡発掘調査報告書　第62集	同	〃
叺屋敷Ⅰb遺跡発掘調査報告書　第63集	同	〃
道地Ⅱ遺跡・道地Ⅲ遺跡発掘調査報告書　第64集	同	〃
館山遺跡第2次発掘調査報告書　第65集	同	〃
湯沢遺跡発掘調査報告書　第66集	同	〃
京都府埋蔵文化財情報　第7号	(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター	〃
市原市の指定文化財	市原市教育委員会	58. 8. 15
年　報　2　昭和57年度	(財)茨城県教育財団	58. 8. 18
新池台遺跡　茨城県教育財団文化財調査報告　第17集	同	〃
大谷津B遺跡　同　第18集	同	〃
平台遺跡　同　第19集	同	〃
鹿の子C遺跡　―遺構・遺物編（上）・（下）―　同　第20集	同	〃
鹿の子C遺跡漆紙文書　―本文編―　―図版編―　同　同	同	〃
木葉下遺跡Ⅰ（窯跡）　同　第21集	同	〃
ツバタ遺跡・高山古墳群　同　第22集	同	〃
自治医科大学周辺地区　昭和57年度埋蔵文化財発掘調査概報	(財)栃木県文化振興事業団	58. 8. 19
滋賀県文化財目録　昭和58年度追録	(財)滋賀県文化財保護協会	58. 8. 8
市原市史　別巻　資料集（中世編）	市原市教育委員会	58. 8. 19
竜角寺古墳群発掘調査報告書（第1次）	千葉県教育委員会	58. 8. 20
小さな展覧会　―昭和57年度発掘調査の成果から―	(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター	58. 9. 6
鴇谷久保向遺跡	山武考古学研究所	58. 9. 8
松ケ崎（Ⅱ）遺跡	同	〃
油井古塚原古墳群	同	〃
辰巳ケ原遺跡	同	〃
東京電力送電線鉄塔建設事業地内八日市場線発掘調査報告書	同	〃
市原の歴史と文化財	市原市教育委員会	58. 9. 14
市原市史　資料集（古代編）	同	〃
年　報　2	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団	58. 10. 13
中　尾（遺構編）	同	〃
大阪文化誌　第16号	(財)大阪文化財センター	58. 10. 14
昭和58年度　市町村文化財保護行政基本調査	千葉県教育庁文化課	58. 10. 31
山　賀（その1）	(財)大阪文化財センター	58. 11. 14
若　江　北	同	〃
第1回近畿地方埋蔵文化財担当者研究会　資料	同	〃
昭和56年度　京都市埋蔵文化財調査概要（発掘調査編）	(財)京都市埋蔵文化財研究所	58. 11. 21
同　（試掘立会調査編）	同	〃
北野廃寺　発掘調査報告書　京都市埋蔵文化財研究所調査報告第7冊	同	〃
文化ホール紀要四　板　碑	松戸市文化ホール	58. 12. 5
文化ホール紀要2　松戸の無形文化財　万作踊り	同	〃
文化ホール紀要5　通源寺遺跡・遺跡シリーズ1	同	〃
文化ホール紀要6　柿ノ木台遺跡・文化ホール資料目録3	同	〃
子和清水貝塚展　―土器は語る―	同	〃

書　　名	寄　贈　者	受　入　日
東京都埋蔵文化財センター　研究論集　II	(財)東京都埋蔵文化財センター	58. 12. 6
山田・宝馬古墳群	山武考古学研究所	58. 12. 7
上行寺裏横穴　第6・7号横穴発掘調査報告書	同	〃
昭和57年度 埋蔵文化財発掘調査概報 美沢川流域の遺跡群　VI	(財)駿府博物館 付属静岡埋蔵文化財調査研究所	58. 12. 15
ママチ遺跡　新千歳空港建設用地内埋蔵文化財発掘調査報告書	(財)北海道埋蔵文化財センター	58. 12. 16
ママチ川障害防止工事用地内埋蔵文化財発掘調査報告書		
旭町1遺跡	同	〃
道道富沢・日高三石（停）線特改第一種工事用地内埋蔵文化財発掘調査報告書		
虎杖浜3遺跡	同	〃
北海道縦貫自動車道白老地区埋蔵文化財発掘調査報告書		
千歳5遺跡	同	〃
北海道縦貫自動車道登別地区埋蔵文化財発掘調査報告書		
川上B遺跡	同	〃
北海道縦貫自動車道登別地区埋蔵文化財発掘調査報告書		
長瀬高浜遺跡発掘調査報告書　VI　（本文編）	(財)鳥取県教育文化財団 鳥取県埋蔵文化財センター	58. 12. 19
同　（図録編）	同	〃
研究紀要　1982	(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団	58. 12. 20
研究紀要　1982（別冊）縄文中期土器群の再編（図版）	同	〃
年報　－3－	同	〃
大山	同	〃
県立ガンセンター関係　昭和56年度埋蔵文化財発掘調査報告 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第17集		
下椿	同	〃
埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第18集		
緑山遺跡	同	〃
埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第19集		
篭田・鶴田	同	〃
埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第20集		
池上西	同	〃
埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第21集		
天神林・高野谷戸	同	〃
埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第22集		
三ケ尻天王・三ケ尻林(1)	同	〃
埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第23集		
ささら・帆立・馬込新屋敷・馬込大原	同	〃
埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第24集		
塚屋・北塚家　本文編	同	〃
同　図版編		
埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第25集		
後張　本文編　II	同	〃
同　図版編　II		
埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第26集		
台耕地（I）	同	〃
埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第27集		
若宮台	同	〃
埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第28集		

書　　名	寄　贈　者	受　入　日
久　保　山 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第29集	(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団	58. 12. 20
中原前・駒前 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第30集	同	〃
千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書 Ⅳ	市原市文化果	58. 12. 21
(財)長岡京市埋蔵文化財センター　第3回文化財講演会 ー長岡遷都の前後ー	(財)長岡京市埋蔵文化財センター	58. 12. 14
掘りおこした郷土史　～最近の発掘調査成果～	同	〃
ガイドブック 長岡京跡 其の三 長岡京物語	同	〃
山武考古学研究所　年報No.1　昭和56年度	山武考古学研究所	59. 1. 9
上野山遺跡発掘調査報告書 岩手県埋蔵文化財センター文化財調査報告書　第67集	(財)岩手県埋蔵文化財センター	59. 1. 10
九戸郡軽米町 馬場野Ⅰ遺跡 岩手県埋蔵文化財センター発掘調査報告書　第68集	同	〃
小井田Ⅳ遺跡発掘調査報告書 岩手県埋蔵文化財センター文化財調査報告書　第69集	同	〃
庚塚・上・雷遺跡	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団	59. 1. 20
町田市木曽中学校遺跡	町田市教育委員会	〃
市原の柳橋神事		59. 1. 25
市原の柳橋神事絵巻		〃
国指定史跡菅谷館跡環境整備事業実施報告書		〃
近江の原始・古代　ー最近の発掘調査からー	(財)滋賀県文化財保護協会	59. 1. 27
亀　井　　付図　13部	(財)大阪文化財センター	59. 2. 8
西岩田　ー本文編ー　付図　26部	同	〃
西岩田　ー図版編ー	同	〃
田山遺跡	同	〃
山　賀（その2）　付図　11部	同	〃
山　賀（その4）　付図　20部	同	〃
(財)大阪文化財センター蔵 図書目録（1983年2月10日現在）	同	〃
友井東（その2）	同	〃
伊篠越徳遺跡	山武考古学研究所	59. 2. 9
埴谷周路遺跡発掘調査報告	同	〃
佐倉文庫第五集　佐倉地方文化（抄）	佐倉市教育委員会	59. 2. 14
埋蔵文化財ニュース　42	宮本敬一	59. 2. 15
同　43	同	
同　44	同	
埴谷周路遺跡	山武町教育委員会	59. 2. 27
福岡市埋蔵文化財センター 年報 第2号　昭和57年度	福岡市埋蔵文化財センター	59. 3. 1
山　賀（その3）　ー本文編ー	(財)大阪文化財センター	59. 3. 16
山　賀（その3）　ー図版編ー	同	〃
山　賀（その3）　ー付　図ー　10部	同	〃
大蔵住吉遺跡	町田市大蔵住吉遺跡調査会	59. 3. 27
倉賀野万福寺遺跡	山武考古学研究所	59. 3. 28
神奈川県立埋蔵文化財センター 年報2	神奈川県立埋蔵文化財センター	59. 3. 29
栗原中丸遺跡 神奈川県立埋蔵文化財センター 調査報告3	同	〃
裏八幡西谷遺跡 神奈川県立埋蔵文化財センター 調査報告4	同	〃

財団法人 市原市文化財センター既刊調査報告書

- 皿郷田茂遺跡　　￥480　（〒別）
- 石川城郭跡　　￥840　（〒別）
- 片又木遺跡　　￥1,200（〒別）
- 池ノ谷遺跡・福増遺跡　　￥800　（〒別）
- 永田・不入窯跡　　￥750　（〒別）

市原市文化財センター年報

（昭和57・58年度）

昭和60年7月31日　発行

発　行　　財団法人　市原市文化財センター
〒290-03　千葉県市原市馬立817
TEL　0436(95)2755

印　刷　　三陽工業㈱市原支店
〒290　千葉県市原市五井5510の1
TEL　0436(22)4348